

刑法沿革誌

属罪之部

卷之十二

特別

73

954

9



73 特
954
9

刑法沿革志卷之十二

屬罪之部

司法省

門保3
號934
卷9

會后
印政

刑法沿革志卷之十二

屬罪之部

雜

濫刑

佐州水替人足 人足寄場入
常州上鄉寄場入 箱館寄場 奉公構 加彼方寄場入
燒殺 斬一身散梟八國 切海賊手足
土磔 切足 切賊手懸獄門 罪 切兩手釘
着板面 切羅 土牢 釜煎牛割
截兩手指 剗刑

拷問

○佐州水替人足

總則

○安永七年觸書云。近來御當地共近國共。無宿者
數多徘徊いた候故。火附盜賊も多。怪敷儀也

司法省

有之。世上一統の難儀。小相成候。畢竟右々一二
夜宛も。無宿共留置。宿等以々候者。有之候故。
右体無宿多致徘徊。不届み至し候。依之町方ハ
勿論。近在共。町役人。村役人共。町方村方。嚴重遂
吟味。前々掟。有之候間。一夜たりとも。身元不
慥成者。留置不申候様申付。在町共無宿共見掛
候。召捕。町方ハ。月番の町奉行へ。召連可出
候。関八州在方ハ。村役人差添候に不及。村繼小
以方。月番町奉行へ。送り越候様可致候。元来
右無宿共の儀も。百姓の農業を怠り。町人ハ。夫

々の渡世を不致。身持不埒故。無宿に相成。彌紛
續兼候節も。火附盜賊を乞。心掛候りの共故。懲
り免の爲。此度無宿共。嚴敷召捕。佐州へ被差遣
候間。在町共。無宿召捕。訴出候とも。後日了出訴
以。候儀ハ。決て不相成候間。見當次第召捕。
可訴出候。若見遁。致置候り。急度答可申付

候。安永七戌
七月定

○評定所覺書云。御相談書。入墨以上。敵申付候無
宿。可引渡方無之分。右御仕置申付候上。追々佐
州へ可遣。その。伺書。黄紙認方。一座區々に不相

成様申合置度。左の通。及御相談候。何々此始未
不届に付。入墨敵申付。追て佐州へ可遣段申渡
山村信濃守へ引渡可申候哉。

入墨敵申付。追て佐州へ遣候段可申渡哉。
入墨敵申付。追て佐州へ可遣哉。

右の内。何々の方。極置可然哉。此評議。

此儀。入墨敵申付候上。佐州へ遣候段。奉
行所の取計候間。黄紙不認入積り。

但出牢證文。入墨敵申付。山村信濃守へ
引渡。令出牢者也。と認候積り。

右寛政元酉年四月十三日。一座評議極内。

○御仕置例類集云。寛政八辰年十二月。御渡。佐渡
奉行伺。佐州金銀山。為水替被遣候無宿共。出精
以々候。之の。歸國の儀。評議。佐州へ遣候
無宿。水替共。年来出精。いた候。共。於彼
地平人に申付。其上歸國願候。奉行承届。歸
國候由。然處右無宿共。身分引請人。此有無に不
拘當人の出精次第。寄候趣。左候へ。歸
國の上。再ひ無宿に成候時。無宿共。減候道。ハ
不相見。又。佐渡奉行書面の趣。無余儀事。ハ。相

聞候。然なまゝ無宿その出来可致筋を其儘
にいたし置候も不可然。何きか無宿ハ減候
仕方も可有之哉の段被仰聞候。

此儀御書取の趣御尤に奉存候間再應評議
仕候處無宿共佐州へ為水替被差遣候節心
底相改候ハ追て歸國仕候儀に可有之旨
町奉行より申渡候儀に付渡海以來出精仕
候を全歸國を心掛候故の儀に候處引請人
無之無宿共生涯歸國不相成儀と心得候ハ
、出精相働可申との有之間敷哉若心得違

を以聊も背候心底有之候ハ彼地良民共
安心不仕段其外委細佐渡奉行申上候趣も
尤に相聞歸國為致候との共此内再無宿ハ
成候節召捕又候佐州へ被差遣候とは差支
無之由も申上候儀小御座候間去々寅年佐
渡奉行伺之通被仰渡相濟候趣を以渡海以
来出精仕候とのとりハ佐州少々平人に申
付何方へ成共罷越度旨相願候ハ手當差
遣出切申付江戸表へ罷出度旨願候ハ交
代此節召連候様取計候ハ一同出精仕儘

ふと相成。小屋内取締方も宜。帰國仕候もの
共引受人無之候と。身分相應の片付ハ可
仕候。右の内無宿共。依願交替此砌。江戸表ハ
召連罷帰候節ハ。如何取計候哉の段。承合候
處。於彼地に平人小申付候上を。無宿の取扱
ハ立離。佐州出生の。も。姑同様の儀と。存候ハ
ゞ。伺濟平人に申付候もの共。此内。江戸表
ハ。召連罷帰候儀未無之哉。ハ候ハ。取計
方心得ハ。前文の通に御座候由申聞候。左候
ハ。平人の儀に付。引受人の有無を不相糾

江戸表ハ。召連候上。勝手次第。手寄此方ハ。罷
越候様申渡候儀。可有之哉。併無宿もの、
出来可仕筋を。致其儘置候。不可然段。御書
取の趣も。再應勘辨仕候處。身持不埒。又ハ。困
窮に逼り。無宿小相成候もの共。此儀を。際限
無之。無宿共増減。不可拘筋。ハ。有之間敷哉。
引受人無之。無宿共ハ。是。まて。門前拂等。小申
付候儀も。御座候間。再無宿。少く罷在候も。此
を。召捕。佐州ハ。遣候と。又。人足寄場ハ。遣
候也。其時宜。小寄。其節々取計候。方可然哉。

小小奉存候。

○享和度御仕置留云。無宿共。佐州へ遣候儀ニ付。御書付此事。近來無宿共多く。自然と悪事致候。候ニ付。無罪の無宿共。先四五人佐州へ水替人足小遣候様可致候。尤無宿共届り不及。勿論水替不精いたり候歟。或虚病等申立候もの也。縦悪事無之候共。拷問同様いたり。其上も不用候り。死罪も行候様可被致候。其段奉行承届候迄も伺り不及。其内も心底直り候もの也。出来候り。相糺候上奉行交代乃

時分。又ハ御用序。當地へ相帰り候様も可致旨。安永七戌年四月。松平右京大夫殿。町奉行へ被仰渡候事。

一無宿多く。冬春乃内々別り。物騒候ニ付。折々無宿惣狩等仕。吟味此上無罪。又ハ入墨敵等の御仕置に相成候無宿共ハ。人足寄場へ差遣候もの也。とも寄場にて冬多人数小相成候もの也。差支り有之候趣も。寄場奉行へ引取願等仕候もの也。夫々引渡遣申候もの也。心底改候もの也。稀にも。又候品々悪事仕候。依之以来ハ。秋より春へ

掛け。三度小拾人程り。一ヶ年三拾人を限り。佐州へ水替人足小。差遣候る。如何可有御座哉。右の通相成候ハ、追々悪者共相減。且水替業出精いたし。心底相直り候ものも。出来可仕哉。既小去為寅年。七人帰府被仰付候ものも有之候以来。年々此儀ニ付。其度々不及伺。人數書を以。御届計申上候様可仕候。尤三十人より内。能増減ハ。其年々に寄。佐渡奉行へ掛合の上。取計候様可仕心得小御座候旨。寛政十年。松平伊豆守殿へ申上候處。其通被仰渡候事。

○人足寄場入

總則

○殿居囊續篇云。寄場奉行。三奉行所。以て。請取たる罪人。無宿。以て。石川佃の二嶋送り。水寄會所。以て。水玉乃贅服をきせ。夫々此手業を以て。せ。是は支配。謂ゆる鬘鉗隸奴なる。云云。此場々。始寛政の度。加役方長谷川平藏組同心。日々相詰。此嶋へ世話人。を召捕て。此所。小置たり。

○御仕置心得書云。寄場人足とも。御仕置申付候

儀

一 盗いたり候もの死罪

一 徒黨之間敷儀いあり候も此同断

一 寄場逃去候もの同断

一 寄場ふかちて博奕致し候もの同断

但手合ふ加り候ものハ其始末ふたし加ひ輕

罪ふ可申付事

一 職業不精又ハ申付不相用類再應答等申付候

ても不承請超過たり候ハ遠鳴但品輕き

ものハ佐州又ハ豆州の嶋々ハ可遣事

一 博奕又ハ悪巧等致し候もの有之儀を申出候

ものハ其品ふ寄相應の褒美を何れハ可申

事

右之通被相心得尤其度々可被相伺候

二月

右之通長谷川平藏ハ申渡候間可被得其意候

寛政二戌
年二月

○御書付留云松平越中守殿より長谷川平藏ハ

御渡人足寄場の儀御主法替被仰出候ニ付其

方組與力同心の儀も其方ハ申渡候趣ふ準ハ

掛り申付立合付切爲相勤可被申候

一御徒目付村田鍬太郎人足寄場奉行被仰付候
寄場元一免役并下役ハ向後鍬太郎支配不成
候間其段申渡引渡可被申候

一御目付間宮猪左衛門人足寄場掛り被仰付候
間是迄取扱来候御入用向其外とも猪左衛門
申談鍬太郎一可被引渡候尤引渡の取調相濟
候迄ハ諸事是ま々の通相心得無差支様可被

致候

寛政四子年
六月四日

○古張紙云寛政四子年八月十二日間宮猪左衛

門より来る肥前守請取

三奉行衆

寄場一被差遣候無宿其外とも平藏方一請取
候上寄場一被差越來候一共左候て右無益此
手數も懸り候事ハ候間以來ハ直尔寄場一被
差遣候様可申合旨越中守殿御書取を以被仰
渡候依之御達申候以上

八月

長谷川平藏

間宮猪左衛門

○御仕置心得書云寄場御仕置之事

司法省

一寄場地所より逃去候之の死罪。

但逃去候節此始末不相構死罪申付来候附人足寄場へ呼出科の始末申渡外人足共小為見置切繩を掛牢屋へ差遣

一寄場使先より逃去候之の死罪。

附右同断

一寄場逃去盗致候之の死罪。

但逃去候後五箇所以上夜盗致候り仕来能通引廻の上死罪

附右同断

一寄場逃去可申と地所内小隠居并盗等いゝ候之の死罪。

一寄場逃去可申と地所内小隠居候之の重敲

但一旦入墨小相成候之ハ増入墨申付来候

附於人足寄場鳴入墨此上

一寄場逃去自分と罷帰候之の重敲

但一旦重敲御仕置小相成又候逃去自分と罷歸り候小おろすハ於人足寄場入墨の上重敲

附於人足寄場

一寄場可逃去と申合候へと良後難を恐逃去不

申候之の。手鎖。

附於人足寄場五日さや。

一無断地所裏手へ罷出。夜ふ入候まゝ。罷在候も
の重敲。

附於人足寄場。

一無断寄場圍外へ罷出候之の。手鎖。

附於人足寄場三十日。

一寄場より引渡ふ相成候後。欠落以多候之の
重敲。

附右同断

一同幼年之の。手鎖。

附右同断三十日。

一於寄場盗い候之の。死罪。

一徒黨ヶ間敷儀致し候之の。死罪。

一職業不精。又ハ申付不相用類。再應答申付候て
も不相用。超過以たし候之の。遠嶋。

一職業を怠。又ハ申付を不用之の等。手鎖入牢。其
外咎申付候儀ハ。其度々相伺不申。相應の咎。申
付候心得ふ御座候。

一博奕又ハ悪巧等致し候之の。有之儀を申出ふ

おろくハ其品小寄褒美を可差遣候

一片髪剃落年限の定有之ハの遣方此儀ハ年限
中ハ平日片鬢剃落置赦免の日數五ヶ月以前
より鬢為立可申候

一當分此咎手鎖或ハ二十敲等此儀ハ不及伺取
計可申候

一癩病又ハ瘡毒の類湯治致シ度旨相願候リ
相應の草鞋錢差遣不及伺放遣可申候

一寄場人足入墨金藏同忠藏寄場逃去佃嶋の方
ハ出同所町家脇小隠を罷在候ニ付寛政三亥

年元相模無宿當時寄場人足入墨市五郎石川
大隅守屋敷内ハ這入夫より地所敷此内小隠
を罷在候御咎の例を以同四子年十一月廿一
日。前書の金藏忠藏御仕置伺ハ添書以多相
伺候處左の通被仰渡候ニ付承付致シ同廿四
日返上

右承付

書面伺の通寄場逃去添屋敷又ハ佃嶋小
て召捕候之ハ入墨無之分ハ寄場入墨の
上重敲入墨有之ハ死罪御仕置可申

付旨被仰渡奉承知候

右之通松越中守殿へ書面の御仕置并御咎の
相當の分ハ定例の通と相認申候右の外ハ是
までの類例朱書ふしの類ハ進達しんたつ候寛政
九年

年閏七
月七日

寄場人足の儀ニ付采女正殿へ御答書上ヶ置
候處右書面の趣おもて宜被思召候間此段拙者
共より相達可申旨被仰渡候ニ付別紙相添
御達申候以上

其方共儀無宿のものニ付佐州表へ可差遣處

此度厚た御仁惠を以寄場人足ふし銘々
仕覺候手業を申付候舊來の志を相改實意不
立帰職出精致し元予もと有付候之様可致候
身元見届候ハ年月の多少ハ無構右場所を差
免百姓素生れものハ相應此地所被下江戸
表出生のものハ出生此場所へ店を為持可
為致家業候尤公儀よりハ職業道具被下候歟
其始末小寄相應の御手當可有之候若又御仁
惠之旨を不辨申付ふ背職業不精ふ候歟
候歟或ハ悪事等於有之ものハ重き御仕置可申

司法省

三河

付之の也。

一此度人足ハ申付候上ハ職業出精緻ハ渡世相續可致躰ハ成候ハ寄場差免家業可相成程の手當差遣身寄ハ引渡身寄無之者ハ出生の所名主ハ地役人ハ引渡家業相續為致候事。

一寄場ハ逃去候ハ始末ハ寄死罪。

一於寄場盗ハ候ハ或死罪入墨ハ敲。

一徒黨ハ間敷儀致ハ候ハ死罪始末ハ寄御定書ハ准ハ御仕置可申付候。

一於寄場博奕ハ候ハ死罪或遠嶋重敲。

一職業不精又ハ申付不用ハ手鎖入牢其始末ハ寄答申付候ハ不用ハ遠嶋申付候事。

一博奕又ハ悪巧等致ハ候ハ有之趣申出候者ハ其品ハ寄相應の褒美を可差遣候事。

一門外ハ出候儀堅可為無用事。

一火の元入念大切ハ可致事。

此度御仁惠を以て佐州兵在溜差免候上ハ右の條々堅相守銘々職業可致出精ハの也。

寛政十

年二
月

○人足寄場へ。女ハ不遣積。同所掛御目付松平田
宮より申上濟。

無宿女ハ。以来寄場へ不差遣積。右ハ享和元酉
年七月五日。火附盜賊改岡部内記掛。甲州無宿
加祿を内記方より差遣候處女を引渡候てハ。
於寄場差支有之趣あり。松平田宮より申上。先
つハ不差遣積ハ相成候てとも。不差遣候て不
叶節ハ。伺の上差遣候積り。享和元酉年
七月五日

○古張紙云。甲州無宿加祿。右此之の去る五日岡

部内記より。寄場へ引渡候ニ付。別紙居所取繕
差置申候。然る處女無宿の儀。長谷川平藏御先
手加役あり。寄場取扱候砌迄ハ。不絶有之候故。
女溜杯同様ハ取繕いども。差置候趣ハ御座候
へとも。近來女無宿寄場へ引渡ハ相成候との
無之。當時も男無宿共計。罷在候場所。女一人差
置候儀ニ付。万一不取締等の儀。出来仕候てハ
如何ハ奉存候間。書面の無宿女加祿儀溜内ハ
成とも。引渡相成候様仕度旨。寄場奉行申聞候。
此段奉伺候處。書面の通被仰渡。以来とも。女ハ

寄場へ不差遣。万一不差遣候て不叶節ハ伺の上取斗可申旨。固部内記へ被仰渡候旨。被仰渡承知仕候。

七月九日

松平田宮

右の趣。松平田宮取扱中。相伺候處承付の通被仰渡候。依之為御心得。御達申候以上。

享和元年
十二月

羽太庄左衛門

○御仕置心得書云。當月十七日。評議仕可申上旨。被仰聞御渡被成候。佐々木三藏。寄場奉行申上候。寄場人足引渡方の儀。共右ニ付。御書取此趣。

一覽仕候處御府内市中。物貰等致し。步行候無宿野非人共。差押寄場へ引渡候様。町奉行へ被仰渡之儀。申上候處。右ハ去る戌年。大澤主馬。御目付勤役中。寄場御入用引足兼候ニ付。人足減方相伺候節。文政三辰年以前の姿小役。江戸拂以上。追放之の引渡方相止候旨。被仰渡の趣ハ。齟齬致し。且無宿野非人共の素性。小寄り寄場へ難引渡之候也。有之候由等。御書取を以。被仰渡候ニ付。猶取調の上。去る戌年人足減方の儀。申上候ハ。寄場定式御入用相嵩候故。相伺候儀。

の處此節の儀ハ於同所小人足共永續の手業
水油絞方為致候小付。人數多相成候ても遣方
有之。取賄方も聊差支無之候間去る成年以前
の通江戸拂以上追放之の并年限申送れもの
もても不苦。尤心底見届候上引受の儀願出候
り。其時々元掛一掛合引渡殊油絞の儀ハ於
在方小重も小相稼候渡世筋故右職分仕覺候
上引渡も相成候り。往々其身の職業も相立御
仁惠此程も相慙可申との儀申上候趣も有之
依之勘辨仕候處去る成年江戸拂以上追放之

の等引渡相止候段被仰渡候ハ畢竟人足追々
相嵩寄場御入用飯米等も差支候趣申上候
故此儀も候處此節手數相懸候業相始。人數入
用も取賄方も於るも聊差支無之との儀
も候り。江戸拂以上追放之の等差遣候段ハ
文政三辰年伺濟以來去る成年迄取計來候儀
故右姿も役候とも素より子細無之其上御府
内市中立廻候無宿野非人の内も穢多非人
の外も引渡も相成是又子細無之儀元來人足
寄場の儀ハ寛政の度格別御仁惠の御趣意を

以。御取建。亦相成候儀ニ付。同所御入用定高相
増候。とて。人足引渡方。差略等可致筋。亦無之候
へ。とも。去る戌年の儀ハ。諸國打續凶作。おて。衆
民困窮離散致し。悪事亦携候。之の。も。不少。臨時
亦召捕寄場へ入。一概亦人數相増事故。更平年
と違ひ。一時の取計。おて。江戸拂以上。御仕置濟
此。之の。不差遣積相成候儀の處。今般寄場奉行。
申立。亦。趣。亦。も。取賄方等。無差支旨。申立候上ハ。
猶更右御仕置。此。之の。引渡方古。復致。聊議論無
之儀ニ付。以来江戸拂以上。追放。之の。其年限申

送。此。之の。引渡方。此。儀。去。向。戌年以前の。姿。亦。復
引受人等有之候節ハ。前々。此。通取計。且御府内
市中。亦。お。わ。る。て。差押候。無宿野。非人。亦。内。亦。も。寄
場へ入。不苦分ハ。是又引渡。亦。可相成候。条。其。段
可心得旨。三藏。并。寄場奉行へ。被仰渡。可然哉。奉
存候。尤右之。通。被。仰。渡。候。り。私。と。も。一。之。被。仰
聞候。様。仕。度。左。候。り。火。附。盜。賊。改。へ。ハ。私。と。も
より。申。達。置。候。様。可。仕。候。右。評。議。仕。候。趣。書。面。の
通。御。座。候。御。渡。被。成。候。書。付。四。通。返。上。仕。候。
天保
十二

丑年
九月

○新張紙云。天保十四卯年十二月廿三日。大炊頭

殿へ御直大和守
能登守
内匠頭立合返達。同廿七日。御同人御直

承り付候様。一座へ御渡。能登守受取。榊原主斗

頭。御目付此節。申上候寄場人足目印の儀ニ付。

評議仕候趣。申上候書付。

書面之通取斗候様可。寺社奉行

仕旨。被仰聞承知仕候。鍋嶋内匠頭

卯
十二月廿七日御勘定奉行

當九月廿六日。越前守御勤中。評議以多可申

上旨。被仰聞。御渡被成候。寄場人足目印の儀ニ

付。榊原主計頭。御目付の節。申上候書付。并阿部

遠江守。町奉行の節。鳥居甲斐守へも。談判の上

取調申上候書面。夫々一覽仕候處。主計頭見込

の趣ハ。寄場人足共仕着此儀。是ま々水玉深出

し候を。相用來候へとも。右ハ。脱捨候へハ。更尔

目印無之。逃去候節。呂捕方。手掛薄く候間。以来

男子ハ。片眉毛刺落し。女ハ。切禿尔以多し候へ

ハ。目印顯然ニ付。自然人心も居合。逃去候への

相減可然旨申上。遠江守見込の趣ハ。寛政度年

限を以。寄場入申付候への。年限中片鬢剃落し

置候儀も有之候へとも一般小眉毛等刺落し候て各寄場一體の風俗小拘り不容易儀ニ付以来罪此輕重尔隨ひ片鬢或ハ眉毛刺落女ハ切禿尔いゝ無罪又ハ至て輕罪の之の小至り候てハ是まての通取計候方可然趣小御座候。

此儀寄場御仕置箇條の儀ハ最初寄場入申付候節同所小おろて夫々為讀聞候儀少て圍を乗越逃去候之の等重科小被處候儀ハ兼て辨罷在尚逃去候之好も有之候程の儀

ニ付遠江守申上候通此上異形の躰等申付候まてあて必定人心居合逃去候之好相減可申との見居ハ無之勿論主計頭遠江守見込の趣も寛政の頃長谷川平藏掛の節一旦伺濟の准例も有之候へとも一體寄場の儀ハ御仁惠此御趣意を以取建置候儀少て寛政九巳年戸田采女正殿御渡被成候同所御仕置箇條の内寄場尔差遣候内心底改候上引取入有之候り引渡遣と有之候見込無罪無宿ハ勿論手放し置良民此害尔相成候

故を以年限等相定寄場入申付候ものあり。常々教諭を加へ改心いたし候上身分引受等相願候もの有之候へ。年限も不拘引渡遣候程の儀ニ有之。然るを逃去又ハ圍内にて悪事いたし候もの。右體厚御趣意をも不辨その儀ニ付夫々御仕置御定被置既圍を破り逃去候ものも至り候てハ遠嶋もも被仰付候程の儀も候へとも。右等専ら懲惡の御所置弥御憐恤の御趣意も尤同所人足るも水玉仕着の起立寄場奉行へ掛合承

紀候處右ハ平藏掛中伺濟の由申傳候まで。ふて文政度寄場類焼の節諸書物焼失いたし書留無之旨申聞主意難相分候へとも強て召捕方目當等の趣意も無之畢竟平人との不立交た免の目印も可有之哉素々右等の譯を以目印等差定候儀ハ寄場人足とも小限り候儀も無之佐州水替人足とも同様の儀。旁前書の御趣意一對異躰の嚴法相立候ハ好候筋も有御座聞敷候間。右目印此儀ハ先づ仕來の通御居被置候方

可然。併是まて各寄場逃去候。是れ追て御仕
置相成候儀。町奉行所の外。他の奉行所等も
てハ。外人足共ハ。右次第可申聞候故。兼て申
渡置候同所。掟の趣をも。等閑ル心得。不届お
よひ候。之の可有之哉。も難斗候間。佐州逃去
悪事いふ候。之の御仕置。此次第。彼地ハ科
書捨札。為建候。ふ見合。以来の儀ハ。いつきの
奉行所。おて御仕置相成候とも。其度々町奉
行ハ。科書相達。右御仕置の趣。外人足ともハ
申渡。為相辨候。ハ。仮令何程深山幽谷。ふ隠

れ忍ひ候とも。被召捕候上ハ。寄場逃去候御
仕置。難遁筋と心得。自然御威光の廣大をも
相辨候道理。おて。右ハ人足とも。改心の一
端。寄場内取締ハ。勿論。逃去候。之の自ら相成。可
然と奉存候。右申上候趣。御取用。ふも相成候
ハ。其段。遠國奉行。并火附盗賊。改ハ。私よ
り相達置候様。可仕候。
右評議仕候趣。書面の通御座候。御渡被成候書
付二通。返上仕候以上。

卯
十二月

遠國奉行
火附盜賊改
一の印状并達書案

以剪紙致啓上候。然ハ御當地寄場人足共の内
圍を乗越。又ハ使先等より逃去候之。召捕御
仕置申付候節ハ。令懲のた災以来右御仕置此
次第外人足共ハ申渡候様可致旨土井大炊頭
殿被仰聞候間。向後寄場逃去候之の御仕置御
申付有之候節ハ其度々科書寫月番町奉行ハ
御達有之候様存候。右可得御意如斯候以上

二月

石河土佐守
鍋嶋内匠頭

鳥居甲斐守

跡部能登守

青山大膳亮

内藤紀伊守

久世出雲守

松平和泉守

但ニ伏見甲府長崎京都大坂山田日光奈良堺
駿河佐度浦賀新瀉等の奉行ハ達同文ニ付略
也。

○御仕置心得書云。當八月廿五日の烈風津波小

て寄場人足追放し。逃去候之の共。捕方の儀。寂
前相達置候處。寄場内取締方。其外差支の儀も
有之候付。掛々ふて。召捕候り。一通り相糺別
段。悪事も無之分。ハ直ル寄場へ引渡候様可被
致候。且又外見込此儀も。有之候ニ付。此節より
追放之の無罪無宿此差別なく。増引渡有之候
様可被取計候事。安政三辰
年十月

○處刑條例

○御仕置例類集云。文化七午年。當時無宿龜吉儀。
町方日雇致し候砌。不斗悪心起り。使先より金

銀錢取逃致し。不殘遣ひ捨候段。不届ニ付。入墨
の上。敲。但可引渡方無之身分ニ付。人足寄場へ
差遣候事。

○御仕置心得書云。文化九申年。無宿入墨已之吉
儀。先達て盗致し候。依科。敲。又ハ入墨の上。人足
寄場へ差遣候處。同所より。使先出候節。逃去候
ニ付。重敲の上。猶又寄場へ遣候處。當九月人足
共の内。相果候死骸を。千住まで持送。立歸り候
途中。又候逃去候始末。不届ニ付。重敲。

○文政元寅年八月。栞川村無宿入墨安五郎儀。先

達て致盜候依科。敵又ハ入墨。重敵の上。人足寄
場へ入。逃去候上。博奕ウヂ候。不届ウヂ候。重敵
の上。猶又寄場へ差遣候處。同所の働難儀ウヂ存
當三月廿八日。同人足病死のウヂ。取置場へ擔
参り。立歸り候途中より。逃去候段。不届ウヂ。重
敵申付候上。猶又人足寄場へ差遣ウヂ。

○文政九戌年。柳生無宿幾太郎事。入墨長藏浪人
竹井文之進と申立候。無宿文之進。其方共寄場
へ入候て以来。申付方相守。出精ウヂ候ウヂ。付
此度寄場差免候。尤先達て。石川主水正申渡候。

御仕置ウヂ趣。可相守候事。

○文政十一子年五月。無宿源次郎。右此ウヂの。江戸
十里四方追放。御仕置の上。六ヶ年以前。未年四
月十九日。御引渡有之。尤引取人有之候ウヂ。も不
引渡。御掛合の上。可取斗ウヂ。御書送り者。小御座
候。然處寄場へ入候て以来。働方出精ウヂ候ウヂ。
二付。役付申付置候處。弥過失も無之。心底も相
直候様相見候ウヂ。付。引取人有之候ウヂ。御懸合
の上。引渡可申處。今以引取人無御座候ウヂ。付。定
例の通取斗。寄場差出候ても。不苦候哉。此段御

問合仕候。

子
五月

高柳平次郎

書面源次郎儀。心底相直候趣。有之候處。引
取人無之候間。定例の通被取斗。寄場差出候
ても。不苦哉の段。御問合小候へとも。右定例
と申儀。如何様の取斗振有之候哉。是まて
の先例。被御申越候様存候。

五月

榊原主計頭

本文定例と申儀。御下け札を以。御問合御座
候。右ハ寄場差出ふりあへ候節。元御懸あて

被仰渡候。御仕置の趣。相守可申旨申渡。請書
取之。御構状相渡遣。兵四季施被下。手業仕
候ものハ。御預錢役付申付候ものハ。品小
寄褒美等。差遣候儀。少て。右等を都て定例と
相唱来申候。依之石川主水正へ。問合候節の
書按一冊相添。此段御答仕候。

高柳平次郎

本文源次郎儀ニ付。下け札を以。御挨拶の趣。
承知いたし候。右手續の通あて。寄場被差出
候ても。差支候儀無之候。

司法省

五月

榊原主計頭

○天保三辰年十一月廿七日。松戸無宿吉五郎右
 引取願人下総國葛飾郡幸館村百姓政右衛門
 無宿入墨鉄三郎。右引取人下総國千葉郡大戸
 村百姓又右衛門。右此之のとも寄場へ入候て
 以来。働方出精い多し候ニ付。追々御掛合仕置
 猶又試候處。弥過失も無之。心底相直候様相見
 前書願人共。引取申度段。申立候。右躰神妙働方
 以多し候之のハ。外人足とも。教示あり相成候
 間。願の通引渡遣候ても不苦候哉。此段御問合

仕候。

辰 十一月

小田又七郎

書面吉五郎。鏑三郎。兩人とも。いまは年限中
 あり候へども。追々御申聞の趣も有之候間
 兩人とも引取人へ。引渡有之候様存候。

辰 閏十一月

筒井伊賀守

○加役方寄場

總則

○御書付留云。松平越中守殿御下知。長谷川平藏
へ。此度加役方人足寄場。取建被仰付候。

一人足共作業の儀ハ。勝手次第得手候儀を為致
可申候。

一職業出精い多く。渡世相續可致體ふ成候との
ハ。寄場差免。家業可相成程の手當差遣。身寄此
者へ引渡し。身寄無之候り。其の出生の所
名主。或ハ地役人へ引渡。家業相續為致候様可

申渡候。

一 職業を怠り。又ハ申付を不用之の等。手鎖入牢。其外咎申付候儀ハ。其度々不及伺。存寄次第可被申付候。

一 重病。又ハ長病の分ハ。溜預申付。かろき儀ハ。寄場あり。手當可被申付候。

一 門出入嚴密あり。立入候町人共ハ。鑑札相渡。みたり。無之様。可被致候。尤番人共。改方入念候様。急度可被申付候。

一 火元の儀。入念可被申付候。

一 寄場諸式入用。當年ハ米五百俵。金五百兩。来年よりハ。一々年米三百俵。金三百兩の積を以て。御勘定奉行相談。入用次第。可被請取候。尤年々仕拂の儀。御勘定所へ。可被申聞候。

一 人足共。追々相増候節。御藏人足。其外御普請場。川浚等の場所へ。差出候様。あり。其外あり。遣ひ方。心得候儀ハ。追々可被申聞候。

右之通可被得其意候。寛政二戌年
二月廿六日

○ 處刑條例

○ 御仕置例書云。寛政三亥年十一月六日。尾張殿

家老山村三郎左衛門。陸尺伊兵衛。外一人右此
まの共儀。當八月朔日。主人三郎左衛門登城い
たし候ニ付。右駕籠を伊兵衛。勝右衛門。大手腰
掛面番所前とも不心付下し候處。同所も相詰
候番人とも。聲掛候し。早速可片寄處。伊兵衛
儀。大勢の中あり。被答外聞悪敷候とて。彼是申
争。其上掃除中間と。同様聲掛候儀を。心外
も存。兼てかき川の儀無之様。申渡の趣乍辨罷
在。勝右衛門儀。雜言乍申。伊兵衛。林藏も同様此
存寄あり。一同右掃除中間太郎兵衛。岩次郎。龜

次郎を。拳あり致打擲。右三人一乍聊。疵付御場
所柄をも不憚始末。不届ニ付。兩人とも敲の上。
三ヶ年此内。加役方人足寄場へ。差遣也。

○寛政七卯年三月二日。松平下総守中間。佐吉右
此まの儀。かき川法外の儀。致間敷旨。主人。又ハ
請人より。嚴敷申渡置候處。内櫻田。下馬もあはる
て。供待の内。酒も給醉。清次郎と。及口論摺合。其
上。同人へ。疵付候段。御場所柄も。不恐仕方。不
届ニ付。敲の上。三ヶ年の内。加役方人足寄場へ
遣也。

○常州上郷寄場入

總則

○御仕置心得書云。御代官へ引請候寄場人足。逃去捕押候節。其支配御代官あり。御仕置申付方此儀。死罪以上。其以下共。引請候御代官。勘辨の上。存寄次第。不及伺仕置申付。跡あり私共まて相届候様。可申渡哉の趣奉伺候處。死罪御仕置ハ重記儀ニ付。不及伺。御代官存寄を以。仕置申付候と如何可有之哉。今一應評議仕可申上旨被仰渡候ニ付。猶又取調候處。長谷川平藏へ被

仰渡候旨ありて。評定所一座へ御渡被成候。寄場
人足御仕置仕方の儀ニ付。別紙御書付の内。寄
場逃去候もの。死罪と有之候間。此度申上候。伊
奈左近將監支配所。常州。上郷村。小屋場逃去候
ものも。死罪相當可有御座候哉。右小准候へハ。
御代官へ引受候寄場人足犯科の節。其度々吟
味の上。私共迄。御代官より申立。私共より御仕
置の儀相伺。御差圖の上。御仕置の儀ハ。御代官
へ可申渡儀ニ候へ共。左候てハ。彼是手重の取
扱小も罷成。此上寄場人足引請候儀を。御代官

ありて。自然と見合候様小も成行可申哉と奉存
候。然處根岸肥前守。佐渡奉行勤役の節。留書の
内。水替人足小被差遣候無罪の無宿。御仕置取
計の儀ニ付。宇田川平七より御請申上候書面
此内。死罪ル行ひ候儀。佐渡奉行承届候まで小
て。同等ありも及び不申旨。御差圖も有之候間。右
を以猶又勘辨評議仕候處。佐州の儀ハ。遠國。殊
冬春渡海の差支も有之候間。伺の上。御差圖を
相待候様ありてハ。水替人足此御仕置。手延小も
罷成候故の御趣意を以。右此通兼て御差圖有

之哉。小奉存候へとも。此度御代官へ引受候寄
場人足も。佐州へ被差遣候水替人足も。何き無
宿を引請候ての取計。小御座候間。右佐州の取
計。小准し。寄場人足犯科の節。死罪遠嶋。ハ其御
代官より。私共迄科の次第を為申立。死罪遠嶋
以下の分ハ。其御代官ふて直ル仕置申付候上
ありて。私共迄相届候様。あり可被仰渡哉。左候し
死罪遠嶋の分ハ。私共差圖仕候上。一通り其節
々御届申上置候様。可仕候哉。依之評定所一座
この御書付寫。兵字田川平七御請書寫等。相添

此段猶又奉伺候。以上。寛政三年二月

○去々巳年。町奉行衆へ被仰渡候。寄場人足御仕
置附。書付御渡被成。右御書面の趣を以。常州上
郷村寄場人足御仕置の儀も取計可申旨。竹垣
三右衛門へ相達候様。昨廿二日被仰渡候。付。取
計方左。小奉存候。

一寄場人足御仕置の儀ハ。御仁惠の趣を不辨。罪
を犯候との。御仕置あり。殊一旦罪科。小被行
候との。又ハ無罪の無宿共。ふても。元来素性不
宜。不束成との共故。嚴重の掟。小無之候てハ。懲

悪の取締も不相立譯を以。格別嚴科ハ被行候
御趣意ト奉存候。右ニ付。都て御代官手限シテ。
御仕置申付候儀ハ無之候處。常州上郷村寄場
人足御仕置ハ限。去る成年長谷川平藏ハ御渡
有之候。寄場人足御仕置の御書付を。御代官役
所ハ請取置。右御書付ハ見合。遠嶋以上御仕置
可相成分ハ。伺の上申付。其以下ハ不及伺。御
代官の存寄を以。其科ハ應シ。夫々御仕置申付。
譬ハ何々ニ此惡事犯候クのシテも。其時宜ハ隨
ひ。重敲。又ハ敲等申付。品々勤辨仕。何れハも本

心ハ立戻。帰農仕候様。御代官存寄一盃取斗来
候儀ニ付。寄場人足ハも御仕置ハ。百姓町人。又
ハ一通りの無宿ハも。御仕置ハを差別有之儀
と奉存候處。昨日御渡被成候。御書面の趣ハハ。
一段弛候姿シテ。御定書の趣ハ准。夫々御仕置
の箇條も相立。殊御書面ハ内ハ御定書の儀も。
粗有之哉ハ相見候間。右の御書面を。其儘三右
衛門ハ相渡候筋ハハ有之間敷哉ハ奉存候間。
別紙御印状案の通。三右衛門ハ被仰渡。以来遠
嶋以上御仕置ハ可相成分ハ。三右衛門方ハハ

吟味詰。相伺前書の御書面に見合。御仕置の儀。伺書へ御附札を以。御差圖有之。尤其段御届被仰上候儀ハ。是まての振合ハ取計候方ハ可有之哉。奉存候。依之別紙御印状案相添。此段奉伺候。以上。寛政十一年八月廿三日

御印状案

其方。御代官所。常州。筑波郡。上郷村。寄場人足共。御仕置取計の儀左ハ申達候。

- 一 寄場圍を破。逃去候との。
- 一 一旦寄場逃去候依料。入墨。敲ハ相成候。後又候

逃去候との。

- 一 寄場使先より。取逃致し候もの。
 - 一 寄場逃去盗致し候との。
 - 一 寄場少テ盗ハ多し候上。可逃去。地所内ハ隠れ居候もの。
 - 一 寄場少テ盗致し候もの。
 - 一 於寄場博奕シ多し候との。
 - 一 非人の儀押隠。寄場ハ罷在候との。
 - 一 徒黨々間敷儀致し候との。
- 右此分。吟味詰御仕置の儀。其時々可被相伺候。

一農業小出置候處。人の目合見合逃去候との。入墨。敲の上。如元寄場小差置。

一寄場使先より逃去候との。重敲。

一寄場逃去可申と。地所内小隠れ居者。重敲。

但氣詰小存。無断地所裏手へ罷出。夜小入候迄。罷在候との共ハ。手鎖。

一寄場逃去候共。自分と立帰候との。逃去候節圍を破候との。入墨。重敲。使先又ハ農業先より逃去候もの。敲。

一寄場可逃去と申合候へ共。後難を恐逃去不申

との。三十日手鎖。

一無断寄場圍外へ罪出候との。手鎖。

一願の上。他出ソ多。夜小入罷帰候との。二十日手鎖。

但右他行先少々。召捕候とも。悪事無之候り。不及咎。

一農業不精。又ハ申付不相用との。三十日。五十日。或ハ百日手鎖。

右の分。不及伺御仕置申付。其段可被相届候。一癩病。又ハ瘡毒。相煩候との。湯治致一度旨。相願

候。相應ふ手當。遣放遣可申候。
一博奕。又ハ悪巧等致一候之。有之儀を申出小
おゐて身。其品小寄。褒美差遣候様可被致候。
右此通以来相心得。可被取計候。前書の外。御仕
置附。難決分ハ。其節可被相伺候。以上。

月日

中 飛彈守

竹垣三右衛門殿

○箱館寄場

総則

○御仕置心得書云。寄場人足共の内。箱館表一相
廻一。彼地おゐて遣ハ方有之候積。委細取調十
分小。右奉行一打合可取計旨。先般被仰渡候小
付。先為試。百人程遣一候積。打合仕置。大ニ其外。
手業有之候之共ハ。此節より増御引渡御座
候様仕度。追てハ手業無之之共。増御引渡方
御達可仕旨。當春中申上候上。御掛合仕置。夫々
見込も附置候處。當八月廿五日夜。烈風其上津

波ニ付。無搦人足共不殘追ひ放し候處。箱館表
一可遣見込の内。居残り候ものも御座候へそ
も。多くハ逃去立帰り不申。右居殘働方仕候へ
の共々。別段取調可申上。次第も御座候故。急速
箱館表ハ難差遣。就てハ津波ニ付。追放し逃去
候人足共。御召捕方の儀。但馬守殿へ申上置候
間。右ニ付御召捕相成。御糺の上。別段悪事も無
之との共儀ハ。去る午年類焼ニ付。切放し候節
の振合を以。御掛々より直ハ寄場へ御引渡御
座候様仕度。且又右箱館表ハ廻し方仕候間。此

上二三百人位まての人足相増候ても。差支無
之候ニ付。去る辰年中。先勤行方源兵衛勤役中。
江戸拂以上。御仕置追放此との共。寄場へ引渡
方。見合ハ相成候様仕度旨申上候處。伺の通ハ
ハ難相成。掛々勤辨の上引渡。人数相試候様。可
取計旨。向々ハ被仰渡候へ共。當節の儀前書の
次第より差支も無御座候間。此節より男女と
も。追放。無罪。無宿の無差別。可成丈増人数御引
渡御座候様仕度。右ハ但馬守殿へ申上候上。御
達仕候以上。

安政三辰年十月

安藤傳藏

○奉公構

○處刑條例

○御仕置例類集云。安永六酉年。伏見宮家司若井大舍人儀。江戸表へ罷下候節。高橋但見より。請取候先觸へ。先規の通。割増無之旨。書加差出。大津宿。品川宿より。割増賃錢相拂候様。問屋役人共。申之候處。先觸り記候。伏見宮より。前々より。割増不相拂旨。偽之儀を申聞。其外の宿々も。ても。割増賃錢。不相拂罷通り。猶又歸京の節。板橋宿問屋役人とも。先觸を以下り候節。東海

道宿々々も。割増賃錢。不相拂候間。中山道々々も。割増賃錢。不相拂候間。請取帳面々々も。割増不請段。書記候様。申遣一候。付。右宿問屋役人共。大舍人旅宿へ罷越。御定の儀。付。割増賃錢。相渡候様。申聞候へ共。割増難差遣旨申候。付。左候々々。道中奉行へ。申出候上。可繼立旨申候處。都て伏見宮より。身。割増不被遣候間。何方へ成々も。可相届旨。不法の返答。以々。候段。不届。付。御所方。撰家。宮。門跡。堂上方。其外奉公相構。永の暇。

○筆垣郡書云。天明七丁未年十二月五日。元万年太郎右衛門手代。大山森右衛門。其方儀。定介事。徳治を殺害致し。松平内藏頭申聞。定介。傳弥。兩人共。内藏頭。松島村名主方へ。引退居申候間。懸合々儀も有之候々々。可致通達旨申候。定助。ハ勿論。傳弥をも留置。松島村名主呼候て申談。品々寄。内藏頭家来々も及對談。取計方も可有之處。兩人の名前承置候迄々々。立歸り候段。其場の始末。臆一候取計。ハ相聞。不束。以々。至不埒。付。武家奉公構。

御仕置例書云。寛政二戌年十一月廿五日。駒木
根大内記組。一柳勘之丞。召仕女ス儀。一柳勘
之丞妻ミ儀。勘之丞物領已之助を。手荒ハ取
扱。衣笠十兵衛儀も。鹿末ハ致ハ候儀。及見罷在。
此者儀ハ。已之助を。鹿末ハ致ハ候儀ハ。無之候
一共。當正月以來。勘之丞中小性。本間要七ト密
通ハ上。懐胎致ハ候段。不埒ニ付。武家奉公構。

御仕置例類集云。寛政五年。辻甚太郎手代。若林
唯一儀。惣七ト倅久藏。溺死ニ付。檢使ハ罷越。金谷
宿ハ此レのハ一通リ口書申付候處。全怪我ハ候

一ハ。申分無之儀故。存命ハ積ニ取斗。事輕相濟
候様。いたハ度音。久藏親惣七。其外一件ハ之レ此
共相願。疑敷儀も無之候。存命ハの口書ハ相直
一同印形申付。右相直候趣キ。甚太郎ハも不相
聞。死骸引渡遣候段。檢使ハ罷越候詮無之。後闇
取計不届ニ付。手代奉公構。

寛政八辰年。角倉與一。元ハ手代原田官藏儀。土
地之格合。不案内ハ候ニも。兼テ御代官より。嚴
重ニ申渡有之上キ。村々より相贈候金子ハの儀。
病中承リ。不正の筋ト心得候節。早速外手代共

一申談。御代官一申達。村々取締ニ相成候様。可
取計處。其儘ニ打過。罷在候段。賄賂請候。同前の
儀。不届ニ候一共。吟味ニ相成候趣承り。一同差
戻候。安田村。岡村より。此金子も。不致開封。其外
の包金も。封の儘。取持い多一罷在。勿論御取圖
割取調ニ不携候上ニ。初發より。賄賂請候。存念
無之段。無相違相聞候得共。外を見合。預り置
候段。不埒ニ付。手代奉公構。暇差遣。

○衛門例類秘録云。天保十亥年八月六日。石川近
江守。足輕上田彦五郎。横地倉之助。同掃除中間

伊之助共儀。御門番所より。酒給申間敷旨。主人
より。申付を相背。御同所より。酒給合。其上。諏訪
甚太郎。口論の相手も無之を。宮地幸八。發言
あり。万治外一人儀。引立来り。理不盡ニ者ニ付。
捕押候旨。大原政五郎一申聞候哉。其儀ハ不存
候一共。得と子細も。不相糺。彦五郎。倉之助を。政
五郎。仕差圖。石垣以上一押倒。伊之助手傳。甚太
郎。刀を。可取上と致。鞘を割。切先を。打折候段。手
荒の致方。旁不届ニ付。江戸拂申付。伊之助之武
家奉公構申付る。

○御仕置留云。天保十三寅年八月廿三日。御小性
組本多佐渡守組。倉橋弥四郎家来。寺門弥五左
工門儀。學問指南致し罷在候處。近来都鄙繁榮
追々無際限。上下人氣。輕佻浮薄。趣候。自然
季世。形ちを相成候儀と存。右等の模様を。漢
文。綴候。寓意有之事。賣出流行致し候。利
潤有之。名前も廣まり。可申と存候。書躰
敗俗。趣意。當り候。不心付。江戸繁昌記
と表題。知人を頼。初編二編。彫刻致し。平
兵衛。賣弘の儀相頼候後。同人より致し差出

候處。賣弘難成段。被差留儀。不存候。引續
五篇。出板致し候分。板木共同人へ賣渡。猶六
篇彫刻の上。藏板致し。都合十部程摺立。望
者共へ。追々賣遣。徳用取。又所持致し居候段。
學問指南致し候。所業有之間敷。不埒
付。所持書物。并板木共取上。武家奉公。構
暇。差出候様。主人へ相達引渡遣。

晒

総則

○科條類典云。晒ハ。日本橋小於テ。三日晒從前々

但新吉原のモル所の儀ニ付。晒ハ可成惡事

候。新吉原大門口元文晒五定

○享和度更正比考録云。晒御仕置仕方。

一晒囚人ハ。本繩ハ縛リ。持籠ハ衆セ。牢屋敷より

晒場迄。召連。右本繩の儘ありテ。小手を免し。柱ハ

縛付。菰の上ハ差置候。尤右小屋入用。代金此儀

ハ。壹兩貳分三匁七分五毛。御入用ありテ相渡し

申候。右晒小屋。并矢此等の。非人。番人。其外とも。逆罪晒者。女犯の出家。相對死仕損候。晒何れも同様の御座候。

○處刑條例

○科條類典云。享保十二未年正月。土井伊豫守掛。常州。水戸。三昧堂罷在候。日蓮宗。所化長延儀。根津門前茶屋より。隠し賣女と出合。所化仲間より預來候。金子等迄遣ひ捨。其上遊女と申合。一所の身を投候處。不相果罷在候。出家の不似合。不届の仕方ニ付。於日本橋。丑六月五日より。三

日さりし。同七日右場所よりあり。本寺觸頭駒込。大衆寺。并長延旅宿同所。浩妙寺。相渡寺法此通申付候様申渡候。

○御仕置例書云。文化十四丑年二月十八日。千住小塚原。新寺町。浄土宗。惠日院。留守居。道心者順道儀。御條目小背候儀を。如何とも不心附。組合隨圓寺。先住慶友住職此節。淺草。元鳥越町。利兵衛より。金子借請。同人舅。知海を。隨圓寺後住此契約より候。證文一。慶友任申致加印。又八同人隱居より候節。知海病身ニ付。後住小成兼

候。迎。同人一證據金預置。隨圓寺請納金。其内受
取。源隆寺榮成。弟子知門を。仮住職可致旨の對
談も承り置。其上同寺へ罷越。及狼籍候。ハ無
之候。ハ。光照寺より知門へ。退寺申渡。後住引
移候。迄引請世話。ハ。候様。聞明寺西澄申聞
候。迎。了順其外。ハ。隨圓寺へ連参り。勝手儘
ハ。掃除等。ハ。所持の木佛。一旦飾置候段。不
法。ハ。至。剃道心者。ハ。候。ハ。清僧の身分。女犯不
相成段。ハ。乍辨。仲ケ間高雲寺留守居。伊ハ娘。ハ
ハ。密通の上。伊ハ存生中。賞請。内分。ハ。院内へ

引取置。了順外二人。出生。ハ。候を。押隠。罷在
候。始末。旁不届。ハ。付。日本橋。ハ。三。日。晒。

○身代限

總則

○科條類典云。身代限。田畑。屋舖。家藏。家財。取上。但他所小家藏有之分。取上。尤も金主立合。吟味此上。金高不足。候。追て取立次第。可相掛旨申付。金高より多分於有之。滞金。小應。為相渡可申候。小作滞身体限。田畑。屋敷。金主。渡置候上。年々作徳を以。滞金於相濟。地所元地主。為相返候。從前之定

○家守小作滞。請狀通此證文。小候。當人證人

共に濟方申付。滯候ハハ。兩人共ハ。身代限可申付。從前之定

○奉公人給金滯ハ。十日限。請人ハ濟方可申付。但日限此節。半金も差出候。十日此日延。其上ハ滯候。身代限可申付。尤主人より。請人ハ相掛候。兩人ハ申付。享保四定

○奉公人請人。店請無之出入ハ。家主引請相濟。當人店立於願。當人ハ門前拂申付。追テ住所見届。家主願出候節。身体限。申付。享保六定
身代限。店借候。家財取上。但地借。テ

家作自分ハ仕候。家財家作共ハ。取上可申候。同上

○奉公人給金出入の儀。前々より請人計ハ申付。人主ハ不申付候。若請人欠落等ハ。不罷在節ハ。人主ハ申付候。自今請人人主。兩人ハ申付。濟方不埒候。兩人共ハ。身体限。享保十一年三月定

○借金銀分散ハ。金銀借方此者。身代分散此節。貸方の内。少々不得心之。有之由。願出候。分散請候様ハ申聞。若不得心ハ候。得心の

この計一。分散割合。為相渡可申候。尤借方此
もの。身上持次第。割合請取候もの。不請取も
の。一同追て相掛り候様申渡之。寛保元定

○小作滞ハ。質地日限の通申付。其上相滞候ハ。
身代限可申付。但作徳の儀。米金共ハ。金主小作
人。極の通。濟方可申。延享二
定追加

○濫刑

燒殺 斬一身散梟八國切海賊手
足 土 磔 切足 切賊手 獄門
罪 切兩手 釘着板面 切羅 土牢
釜煎牛割 截兩手指 剷刑

○燒殺

○處刑條例

○日本書紀云。雄略天皇二年秋七月。百濟池津媛。
違天皇將幸。媼於石河楯。舊本云。石河楯。天皇大怒。
詔大伴室屋大連。使來目部。張夫婦四支於木。置
假廢上。以火燒死。

○安土日記云。天正己卯十二月。攝州アマカ崎花
熊渡シ。進上不申。為懲人質御成敗ノ様子。山崎

ニテ。條々被仰出。荒木一類ノ者。此外攝津國ニ
テ。頭ヲフル程ノ者ノ妻子。エリ出シ。龍川蜂屋
惟任三人トメ請トリ。十二月十三日辰刻ニ百
廿二人。尼崎近キ。七松ト云所ニテ。ハツ、ケニ
懸ヘキニ相定。鐵炮ヲ以テ。ヒシヒシト打殺シ。
此外女ノ方。三百八十八人。カセ侍ノ妻子。付々
ノ者。凡ナリ。男ノ方。百廿四人。是ハ歴々ノ女房
衆ヘ付置若黨ナリ。合テ三百十餘人。矢野善七
郎御檢使ニテ。家四ツニ取コメ。込草ヲツマセ。
燒殺サレ候。風ノマハルニ隨テ。魚ノコソル様

ニ。上ヲ下ヘト。ナミマリ。焦熱大セウネツノ。ホ
ノヲニムセヒ。ヲトリ上リ飛上リ。悲ノ聲。烟ニ
ツ、ヒテ。空ニヒ、ク。獄卒ノ呵責ノセメ。是十
ルヘシ。肝魂モ失ヒ。二目。更ニミル人ナシ。哀
成次第。中々申尽シ難シ。

○天正十年壬午四月三日。去程ニ今度。於惠林寺
ニ。佐々木次郎ヲ隱置ニ付テ。其過怠トシテ。三
位中將殿ヨリ被仰付。御成敗之御奉行。津田九
郎次郎殿。長谷川與次。関十郎左。工門尉。赤坐七
郎右。工門以上。右御奉行衆罷越。寺中不殘老若。

山門へ呼上セ。齋門ヨリ山門へ籠草ヲ積セ。火
ヲ被付候。初ハ黒烟立テ見ヘ不_レ分。次第ニ烟細
テ燒上リ。人之形ノ見ユル處ニ快河長老ハ少
モサワカス。坐ニ直リタル俣不動。其外老若兒
若衆。踊上飛上。互ニ抱付。モタエコカレ。焦熱大
焦熱ノ焰ニムヤヒ。火血カ苦ヲ悲シム。中四月
三日。惠林寺破滅。老若上下百五十餘人。被燒殺
訖。

○織田信長譜云。元龜十年二月。勝頼殺木曾人質。
而後納諸所人質三百餘人於新府城中。以焚殺

之。而携已妻兒。而首途。從者皆墮淚以出府。

○斬一身散梟八國

○處刑條例

○日本書紀二十一卷云。崇峻天皇二年秋七月。物部守屋大連資人。捕烏部萬將一百人。守難波宅。而聞大連滅。夜逃向茅渟縣。遂匿山。朝廷議曰。萬懷逆心。故隱此山中。早須滅族。有司遣數百衛士。圍萬。競馳射萬。便拂捍飛天。殺三十餘人。以刀子刺頸死焉。河內國司。以萬死狀。牒上朝廷。朝廷下符。稱斬之八段。散梟八國。河內國司。即依符旨。

臨斬梟略第

○切海賊手足

○處刑條例

○續古事談云。殿上ノ逍遙ハ。代ノ始コトニ。必アル事也。鳥羽院ヨリ後。タエニケリ。後冷泉院御時。經成ノ中納言。藏人頭ニテ。アリケルニ。殿上人ヲクシテ。六條齋院。大膳職ニ。オハシマシテ。ルニ。マツ參テ。ソレヨリ。大井ニムカヒケルニ。堀川右大臣御子。左ノ民部卿ヨリ。ハシメテ。人々大宮近衛ノ御門ニ。車タテ。ミラレケルニ。經成ウルサシトテ。中御門ヨリ出テ。南サマニ。

ユキケレハ。又々車ヲハセテ。サハキケリ。經成
ナヲ無愛ノモノナリトソ。イヒアハレケル。此
經成ヲハ。アラモノトテ。頭ノ時モ。アラ頭ト云
テ。別當ノ時モ。荒別當トソ云ケル。コノタヒノ
逍遙ノ和歌ノ序ヲ。式部大輔國成朝臣書タル
ニ。命黃頭而棹水郷ト。カキタリケル。コレモ經
成ヲ。イフナルヘシ。經信朝臣歌ニ。アラシノヤ
マトヨメルモ。コノコ、ロトソ。人申ケル。此經
成。スクヨカナル人ニテ。公事奉行ユルサ、リ
ケリ。此人別當ノ時。上東門院東北院ツクリテ。

言
法
書

供養シ給ケルニ。公家大赦。オコナヒ給ケリ。別
當コノヨシヲ聞テ。人ヲツカハシテ。獄ニマリ
ケル。海賊三人カ。手足ヲキリテケリ。時ノ人赦
オコナハレスハ。三人シナサラマシ。大赦カヘ
リテ。死罪ナリトソ。ナケキケル。

司
法
省

○土磔

○處刑條例

○平治物語云。範賴義經二人ノ舍弟ヲ差上セラレケル時。長田父子ヲモ。相添給フトテ。身ヲ全クシテ。合戦ノ忠節ヲ致セ。毒藥變シテ甘露トナルト云事アレハ。勲功アラハ。大ナル恩賞ヲ行フヘシトソ。約束シ給ヒケル。然レハ木曾ヲ退治シ。平家ノ城。攝州一之谷ヲ攻落ス。註進ノ度コトニ。忠宗景宗ハ。軍スルカト。問給フニ。又ナキ剛者ニテ候。向フ敵ヲ討。當ル所ヲ破ラス

ト云事ナシト申セハ八島城落タリト聞ヘシ
 時今ハシヤツ親子ニ軍セサセソ討セントラ
 ト宣ケルカ軍果ラ土肥ニ具シテ歸參ケレハ
 今度ノ擧動神妙也ト聞ユ約束ノ勸賞取ラル
 ソ相構テ頭殿ノ御孝養能々申セ成綱ニ仰含
 タルソト有シカハ喜テ罷出タルヲ彌三小次
 郎彌三京師本作野上按東鑑有野三刑部丞成
 綱者與此云成綱一人邪然則弥三野上共恐
 矣訛押寄テ長田父子ヲ搦捕磔ニコソセラレケ
 レ磔ニモ直ニハ非ス頭殿御墓前ニ左右ノ手
 足ヲ以テ竿ヲ尋カセ土ニ板ヲ敷テ土磔ト云

物ニシテナフリ殺ニソセラレケル京師本云
 左右ノ手
 足ヲ大釘ニテ板ニ打着爪ヲハナシ面ノ皮ヲ
 剥四五日カ間置テナフリ殺シニソセラレケ
ル云

○切足

○處刑條例

○百練抄云。仁安二年六月十七日。去十日。殺繼父
殺母之女。切足。

○切賊手懸獄門

○處刑條例

○百練抄云。治承二年五月十九日。別當時忠卿。切強盜十二人右手。懸獄門。希代事也。經成卿廳務之時。有此例云々。

○ 採

○ 處刑條例

○ 吾妻鏡云。文治二年後七月廿九日。靜產生男子。是豫州息男也。依被待期。于今所被抑留歸洛也。而其父奉背關東。企謀逆逐電。其子若為女子者。早可給女。於為男子。今雖在襁褓內。爭不怖畏將來哉。未熟時。斷命條可宜之由。治定。仍今日仰安達新三郎。令弃由比浦。先之新三郎御使。欲請取彼赤子。靜敢不出之。纏衣抱卧。叫喚及數尅之間。安達頗譴責。礮禪師。殊恐申。押取赤子。與御使。此

事御臺所御愁歎。雖被宥申之。不叶云々。

鎌倉大草紙云。應永四年正月廿四日。小山若犬
九子こも二人。若年め何りを。會津の三浦
左京大夫。是をめしり。鎌倉へ進上しを。
賢檢の後。六浦の海に沉めるを。

○切兩手釘着板面

○處刑條例

東鑑文治五年九月九日云。今日二品猶逗留蜂社。而其近
邊有寺。曰高水寺。是為稱德天皇勅願。諸國被安
置一丈觀自在菩薩像之隨一也。彼寺住侶禪修
房以下十六人。參訴于此旅店事。其故者。御宿之
間。御家人等僮僕。多以亂入當寺。故取金堂壁板
十三枚畢。冥慮尤難測。早可糾明者。二品殊驚歎
給。則可相尋之旨。召仰景時。景時尋糾之處。宇佐
美平次僕從所為也。仍召進之。於衆徒前。加刑法。

司去首

可令散被鬱陶之由。重被仰之間。令切件犯人之
左右手。於板面以釘令付其手訖。

○切羅

○慶刑條例

○皇帝紀抄云。承元元年二月十八日。源空上人。法号
然流土佐國。依專修念佛事也。近日件門弟等。充
滿世間。寄事於念佛。密通貴賤並人妻。可然之人
々女。不拘制法。日新之間。擷取上人等。或被切羅。
或被禁其身。女人等。又有沙汰。且專修念佛子細。
諸宗殊鬱申之故也。

○土牢

○慶刑條例

○北條九代記云、日蓮スナハチ、立正安國論一卷ヲ作り、文應元年七月十六日、鎌倉ノ奉行宿谷左エ門入道最信ヲモツテ、時頼入道ニマイテセタリ、時頼入道、是ヲ聞キ見タマフ所ニ、日蓮ノ志、我執輕慢ノ中ヨリ、宗門建立ノタメ、書記セラレ、天下コノ宗門ヲ用サルヲ憤、世ヲ呪詛スル思ヒアリ、文章ノ趣、隱スヘカラスト、讒申ススアリケレハ、打捨ラレテ侍リケリ。又傍

ラニハ。日蓮法師珍キ宗門ヲ立テ。諸宗ヲ誹謗
シ。鎌倉ノ執權奉行頭人ヲ惡口シ。我慢自大ナ
ル。世ノタメ。人ノタメ。災害ノ根ナリト。申沙
汰シケレハ。カ、ル惡僧ナラハ。鎌倉中ニ許シ
置。然ルヘカラストテ。弘長元年五月十二日。
行歳四十歳ニシテ。日蓮法師ヲ。伊豆國伊東ノ
浦ヘ流サレ。伊東八郎右工門尉朝高ニソ。預ケ
ラレケル。同三年五月ニ。召返サレ。文永年中。日
蓮法師名越ノ草菴ニアリナカラ。諸宗ヲ誹謗
シ。行徳ノ碩學ヲ惡口シ。將軍家ヲ呪詛セラレ

、ヨシ。伊和瀨大輔申行ヲ旨アリテ。弟子擅那
六人共ニ。宿谷ノ土牢ニ入タリケル。然レモ。猶
諸人ノ怒リヲ。宥メンタメ。龍口ノ海邊ニ引出
シ。斬罪ニ行ハントス。相州深ク憐ミテ。俄ニ赦
免セラレケリ。此法師。鎌倉近ク叶フヘカラス。
遠島ニウツスヘシトテ。武藏前司ニ仰セテ。佐
渡島ニコソ。流サレケル。同十年二月ニ。相州時
宗大赦オコナハレ。鎌倉ニ歸リ入ル。

○大平記云。建武二年五月三日。大塔宮ヲ。直義朝
臣ノ方ヘ。被渡ケレハ。以數百騎軍勢。路次ヲ警

固シ。鎌倉へ下シ奉テ。二階堂ノ谷ニ。土籠ヲ塗
テ。置進セケル。南ノ御方ト申ケル上臈女房。
一人ヨリ外ハ。著副進スル人モナク。月日ノ光
モ見ヘヌ。閣室ノ内ニ。向テ。ヨコギル雨ニ。御袖
濡シ。岩ノ滴ニ。御枕ヲ千ワビテ。年ノ半ヲ過シ
給ケル。御心ノ内コソ。悲シケレ。君一旦ノ逆鱗
ニ。鎌倉へ下進セラレシカドモ。是マテノ沙汰
アレトハ。叡慮モ不赴ケルヲ。直義朝臣。日來ノ
宿意ヲ以テ。奉禁籠ケルコソ。淺猿ケレ。

○釜煎牛割

○處刑條例

○信長記云。勝頼カ一門從類。一時ニ亡果テ。哀ヲ
ト、メシ事ヲ按スルニ。連々ノ積惡ニ依テ。因
果歴然タル者也。彼祖父信虎。領地ヲ奪取シカ
為。兄弟ヲ殺シ。或祿多者ニハ。虛名ノ罪ヲ云カ
ケ。寺社領等ヲモ。ヲトシ取。猶落サレヌ所ヲハ。
新義ノ課役ヲ當。凡ヘテ不應ノ事ヲ以責ル間。
法ヲ犯者多カリシ。疲馬鞭箠ヲ不恐ノ罪ヲ犯
ス者多シトハ。加様ノ事ヲヤ申ヘキ。辱ク已ラ

責テ。薄ク人ヲ責ル。心非レハ。彌士民ノ科ト心得。輕キ罪ヲハ重クシ。重罪ヲハ。釜ニテ煎ル事。毎日五人六人ニ及ヘリ。人ヲ殺ス事少キ日ハ。食物モ難進ナト。云ケルカ。サレト。二親ノ忌日ニハ。左モ無リシトカヤ。

○齋藤山城守道三。忽ニ彼思フ忘。古主土岐家ノ事ヲ云テラシ。今此沙汰ニ及フ條。大逆ノ至リ。前代未聞之。無道者ナレハ。國ノ政ハ。夢ニモ不知。小過大科ヲ論セス。己カ機嫌ニ任セテ。或ハ牛裂ニシ。或ハ釜ニ入テ煎殺シ。其火ヲ罪人ノ妻子兄弟ニタ

カセ。或ハ柱ヲ懷セテ。焙リケリ。

○太閤記云。福島市松。後号左衛門太夫。領於備後安藝了。諸士を事外。さみ下。諸臣の恨多き人也。小過を大にふる行ひ。或牛裂。或煎ころ。或刀脇差を取引張伐。或杖め。多きある。或指ひを切あせ。事其數を不知。元和之末。背制法事在之。在信州領四萬石。終其所以。失ぬ。息備後守。酒に於不。父より前に病死せ也。

○太閤記或問云。秀吉公之時。都に三奉行有て

○截兩手指

○處刑條例

○駿府記云。慶長十九年九月十三日。今日原主水自關東搦來。則兩手指ヲ截。額ニ火印ヲアテ。彼者擧用スル者。於有之者。可為曲事之由。被添制札。被相放。彦坂九兵衛奉之。是者吉利支丹也。

○同月十九日。吉利支丹清安ト云者。籠舍之内。同籠ニ在之。罪人二人ヲ。宗旨進メ。依之。額ニ十字火印當テ。十字指ヲ截。被追放云云。

○剗刑

○慶刑條例

○駿府記云。慶長十九年十二月朔日。鍋島信濃守
獻生虜一人。令問城中事給處。不分明。仍剗刑。可
追放由。被仰出。

○拷問

總則

○斷獄律云。應議請減。若年七十以上。十六以下。及廢疾者。並不合拷訊。皆據衆證定罪。違者以故失論。

○應訊囚者。必先以情。究察詞理。反覆參驗。猶未能決。事須訊問者。立案同判。然後拷訊。違者笞五十。若贓狀露驗。理不可疑。雖不承引。即據狀斷之。

○拷囚。不得過三度。數惣不得過二百杖。罪以下。不得過所犯之數。拷滿不羨。取保放之。即有創病。不

待差而拷者杖六十。若依法拷決而邂逅致死者勿論。

○拷囚限滿而不首者反拷告人其被殺被盜家口親屬告者不及拷。注云被水火損敗者亦同。

○婦人懷孕犯罪應拷及決杖笞若未產而拷決者杖八十傷重者依前人不合捶拷法告者各減二等產後未滿百日而拷決者減二等。

○獄令云凡察獄之官先備五聽。謂五聽者一曰辭則煩二曰色聽觀其顏色不直則觀其氣息不直則喘四曰耳聽觀其聽聆不直則惑五曰目聽觀其眸子又驗諸證信事狀疑似猶不

首實者然後拷掠每訊相去廿日若訊未畢移他

司仍須拷鞫者囚移他司者連寫本案。謂問囚之條問囚辭定訊俱移則通計前訊以究三度即罪

非重害。謂依律被斂被盜被及疑似處少謂雖是疑似處少不必皆須滿三若囚因訊致死

者皆具申當處長官在京者與彈正對驗

○凡訊囚非親訊司不得至囚所聽聞消息。謂其解

者省判事得聽自餘不合

○刑部式云凡僧尼犯罪應訊者據衆證定刑不須捶拷其應還俗者具注本貫姓名年紀臈數移送

治部民部等省除附帳籍

○凡犯罪之人或疴或弱決杖之時且寒且熱重加頓杖恐致死亡須量其貌滿役之間准折決畢

○金玉掌中抄云拷掠事獄令云杖皆削去節目長三尺五寸訊囚及常行杖大頭徑四分小頭三分笞大三分小二分律云拷囚不得過三度數惣不得過二百杖罪以下不得過所犯之數拷滿不承取保放之三度拷各相去廿日極熱極寒并齋日不拷一度數六十五一度數六十五一度數七十

○不拷訊人事僧尼見刑部式有官位見名例律五位已上子

孫同律癯疾見獄令年七十以上十六以下懷孕

侏儒已上不拷訊以證人決事然而近代僧侶

五位已上子孫有其例自餘不然云

○科條類典云元文四年三月差上翌申五月十日緣色御書入御好北趣有之帳面北内拷問申付盈き品の事

一惣て拷問申付候儀人殺或ハ盜賊ケ様北類畢竟死罪小被行候科未相決節の儀小候輕き科人白状不致候とて拷問小及間敷候重き科人小ても證據無之猥小拷問申付間敷候依之拷

問可申付品々。左の通ハ候。

一 悪事致シ候證據ト。慥ハ候へとも。白状不致シの
此事。

一 同類ハ之の。白状ハ大ハ候へとも。當人ハ白状
不致シもの。事。但差口斗マて。證據ト慥ハ無シハ。
拷問致間敷事。

一 詮議有リ之。科ハ未相決候へ共。外ハ悪事有リ之。分
明ハ相知ル其科斗マても。可被行罪科トの。事。
右ハ外マても。事品ハより。拷問申付。可然趣ハ
候ハ。奉行中相談ハ上。可被申付事。享保七
寅年

○筋違ハ之の。拷問申付候儀ニ付。御書付。

房州大里村藤七下人太兵衛儀。同國滑谷村源
太郎忤源内。丑六月四日ハ夜。藤七宅へ忍入候
節。追掛け出。源内ハ手疵負セ。相果候儀ニ付。仕
形怪敷候故を以。太兵衛拷問申付候。右源内手
疵負セ候節。忍入様子。藤七下人とも。并泊合候
之の。又ハ向隣。其外近所ハ之のとも出合。大勢
の證據も有リ之。其上藤七下人庄三郎ハ。源太郎
從弟の由。此ハ之のも。右の通申候へハ。旁證據も
有リ之候へ共。拷問申付間敷處ハ。初發ハ存所。何

も違候故に候。此上太兵衛出牢申付候時、拷問申付候事を、可申聞品も有之間敷。就夫向後、拷問申付候もの、分、怪敷存候一通りしてハ、拷問申付間敷儀に候。詮議の上、其品少々も、手筋聞取候歟。又ハ人殺等して、其譯決候へ共、右の詮議ニ付、外ハ盗などの事、疑敷儀に候歟。并公儀へ對し、不届の儀有之品ハ、拷問可申付事な候。享保七年二月

○三奉行へ御渡被成候御書付、拷問可申付品此但書例。

一拷問者有之刻、寺社奉行掛り候ハ、爲立合家来一人、可被差越候。御勘定奉行掛り候ハ、御小人目付二人、可被差越候。

右此通、向後可被得相心候。寛保三年七月

○御渡被成候御書付

一拷問之有之刻、立合の儀、去々亥七月相達候、向後於牢屋、吟味之有之節、拷問不限、口問等此節も、立合此もの差越、吟味此様子申口、得と承届候様よ、可被致候。延享二年二月

○拷問可申付品の事

一人殺。享保七火附。全盜賊。上関所破。元文五謀書

謀判。上右北分。悪事ハ大一候。證據小候ハ。

不致白状之の。并同類の内。白状ハ大一候ハ共。

當人白状不致之の。事。

一詮議。此内不決。外悪事分明ハ相知。其科ハて。死

罪可被行之の。事。

右北外ハも。拷問申付。可然品も有之候ハ。評

議の上。可申付事。

但拷問口問の節。立合ハ之の差越。吟味の様子

申口。得と承届候様子。可申付事。享保三年追加

○徳隣嚴秘録云牢問之事

一吟味方與力同心。牢屋舗へ罷越。御徒目付御小

人目付立合。與力問之。

一穿鑿所砂利の上へ。筵を敷。囚人を引居る。尤囚

人へ。手鎖を掛け。牢屋打役同心差添。下男引連

来る。

一囚人身分ハ寄。穿鑿所疊ハ上へ。出候節ハ。打役

兩人。左右より挾之。揚り屋之のハ。椽側へ出る。

打役囚人臺へ罷在る。

一最初口問。又ハ問書。讀聞せ候も有之。弥申陳居

り候へハ。筵北上へ引おろし。下男手鎖を外し。直小打役太繩にて縛り。左小圖圖ハ行刑ス載ス如く打續け亦石小も掛る。

一白状およひ候へハ。繩を解醫師藥を用申。水を吞せ。其座小て。白状書へ爪印を為致。あ人た小乗せ。形釣臺小牢内へ歸す。

○拷問之事

一都て牢問北通。先つ穿鑿所へ。囚人呼出し。白状不致候ハ。拷問申付候旨。利解申聞。夫より掛り役人立合とも。一同拷問藏へ罷越着座。囚人

ハ手鎖北儘跡より拷問場所へ引連せ。再應理解申聞候上。圖圖ハ行刑の如く掛る打役取斗。下男手傳之。

○享保撰要類集云

一科人又ハ御仕置ハ。伺書被差出候節。右科人名書北上。何月幾日揚り座敷有之儀書付可

被出候事。享保五年二月

○拷問可仕筋之事

一重科北をの。并盜人北類。詮議の上。一通りハ申候へとも。紛敷儀歟。怪敷筋有之。難決者。但其科

の品一通りハ。白状仕候へとも。紛敷事共申。僉
議此筋不残決定不仕ハ。或ハ對公儀候儀。或
ハ難差置儀申出候事有之。怪敷候て。決定不仕
もの。致拷問候様小。可仕候。
一 慥成指口有之候へとも。白状不仕候との。
一 悪事の差口有之。詮議仕候て。證據も無之。拷問
仕筋ハ。無御座候へとも。右詮議此内。外の事
ニ付。重筋相聞候との。但縦ハ盗仕候由。指口有
之候へとも。無證據ニ付。拷問仕かき所。此も
の前方。人を殺候と歎。火を附候科。其外重き悪

事仕候旨申との有之。其儀承候ても。申争ひ候
ハ。拷問可仕候。
右此通。自今以後。相心得。拷問可仕候。此外拷問
可仕哉否。一座相談仕候ても。難相決儀ハ。至其
節可奉伺候以上。享保七年三月廿六日
○評定所格例云。萬石以上。御詮議の事。附一座掛
ふて。御目見以上の忤。吟味此事。
一 寶曆八寅年九月廿六日。金森兵部。本多長門。於
評定所。御老中御出座。御詮議の始末。是内座。其
外御吟味席の圖。左之通。圖ハ行刑載ス但寶曆元未

司書省

年九月二日。植村千吉。御詮議。於評定所。有之。其筋の内座。并御座敷取。小准。左の通御吟味。ハ。一。小兵部。二。小長門寺社奉行。尋る。留役銘々の申口書留る。且入口迄。御徒目付。町典力。差添。夫より出役御目付。兩人挾。

一。兵部長門御預。被仰付候段の申渡ハ。御老中御退散後。主殿頭。も。闕座。よて。右親類一人宛。席へ出。大目付申渡。此時。掛南を向。並。留役も。未。並。

○評定所。小おゐて。公事吟味物。留役相糺候節の事。

寶曆九卯年二月廿六日。堀田相模守殿。月番。三奉行へ御渡。

評定所へ。奉行出席無之。留役斗。よて。尋等致候節。向後御徒目付。立合候様。可被致候。

一。牢屋敷。よて。致牢。問候節。も。是又向後御徒目付。立合候様。可被致候。

右之通。御目付へ申渡候間。可被得其意候。

○聞傳叢書云。白状不致もの。御仕置此事。是ハ重き科有之との。強く痛め候ても。不致白

状。惡事致し候證據有之歟。又ハ一件のもの共
申口。一同符合致し候歟。何き其科分明の處。彼
是申陳候類。御仕置一等重く。被仰付候段。承候
ニ付。其筋へ承合候處。白状不致。逆。一等重く被
仰付候と申儀無之。白状不致ニ付。無據察度詰
ふて。御仕置被仰付候共。たとへて。死罪ハ死罪。
遠嶋ハ遠嶋。其科ニ當り候。御仕置被仰付候由。
挨拶有之事。但たとへハ。人を殺候との。何そ證
據ふても有之歟。一件申口。一同符合いたし候
歟。其との所為ニ無紛故。色々責問候ても。白状

不致。無據證據明白の所。申陳候段。不届此旨小
て。下手人等仰付候儀も無之事。小も不相聞候
へとも可成丈。上手ニ問落し。察度詰ふハ。不致
方。宜由承候事。安永
己年
一縛方ハ。後手小縛り。右の手首を。肩骨北上へ上
け候。右躰致し候へハ。両肩へ肉集り候故。其上
を敲き候様。痛み強く候共。骨へ當り。不申候付
體の痛ふ。相成不申候。但繩掛候時。咽へ繩を掛
候てハ。志は殺候事も。可有之。左様此節ハ。前の
方。帶より繩を取候事。

右の通致一候ても。相陳候ハ、薪六七本なりト
へ。後手小縛候より。小て。兩の膝をまくりせ。右
薪の上へ居らせ。縛繩の餘よて。後の柱へ志む
り付。膝へ石を載せ候。但薪六七本並と。有之候
へとも。盜賊方。并傳馬町牢屋。小てハ。三角木三
本並る也。

右石二三枚。ひさへ載置。其上小も相陳候へハ。
段々増七八枚。又ハ十八枚も積申候。石高く成
る時。石よて胸を打候間。後へそ至候程。小。う
ろの柱へ縛付候事。

右の通一應ハ。薪へ載せ候ても。又薪よりおろ
し利害申聞。再應も縛敲。色々致し。吟味致事小
候。尤氣絶可致。小ハ候へとも。若氣絶ハ。一候
ハ、多々藥ハ勿論。醫者を呼寄置候事。天明五
月

○前之張紙云。嚴敷吟味之仕方書付。囚人へ再應
利害申聞。相陳候へハ。痛可申旨。威し候上。う
ろ手小縛り。其上小ても。自状不致候ハ、箒尻
小て。兩の肩を敲候事。但うろ手小縛り。左右
の手首を。肩骨の下よて。志欠上げ候へハ。兩の

肩へ肉集。其上を敲候間痛みハ決よく候へ共。骨へ何より不申故骸のつかき小成不申。且箒尻と申ハ。きくり藁を觀せよりふて卷。長さ一尺九寸。太き五寸廻りふ。以たり候事。其上ふも。相陳候節ハ。薪六七本なりへ。志をり候儘よて。兩のひさをまくりせ。薪の上小居りせ。縛り繩の餘りよて。うしろの柱へく、り付。ひさの上へ。石を二三枚置。段々石を増候事。但うしろへ志をり付候ハ。石ふてむ収を打不申ため。そとせ候仕方候。

右の通一應薪へ載又ハ引おろし。利害申聞。再應も縛り。白状為致候事。小候。尤氣絶不致様。ハため可申。勿論醫師をも呼寄置事。小候。寛政元酉年二

月廿五日

○舊撰要集云。天保十一子年八月。極老此の牢問申付候儀ニ付。寺社奉行答書。私掛甲州小屋敷村神主土屋石見。不届有之牢問の儀。遠山左衛門尉へ達置候處。右ハ七十九歳。相成候とのふて。極老のより牢問申付候儀ニ付。心得方取調可申上旨。被仰聞候。

此儀七十歳以上ハ相成候老ハ此ハ之ハ牢問申付候。元極御定ハ勿論。前々ハ評議濟等モ無之候ヘとも。石見儀ハ數十年の巧を以。甲州神主共。百人餘の頭職ハ可相成と。是迄數度奉行所ヘ品々申出。其度々存意難立。濟口吟味下け等ハ相成。今般猶又。不恐公儀巧致ハ。右ハ忤玄蕃ヘ差越候。書状の趣ハて。罪状明白ハ候處。元來姦智深く。七十歳ハ相成候ヘ共。愒忘の體。更ハ無之。再應察度申聞候を。彼是品能申紛。嚴敷責問不及候テハ。逆モ白状致間敷。七十歳已上

此ハ之ハの。敲以下。輕御咎等ハ付テハ。前々評議濟モ有之候ヘとも。右ハ刑名此儀。今般此見合ハ難相成。老耄ハたハ不覺嚴科犯ハ。或ハ舊惡發覺ハよハ候類とも。譯違。右能巧の取斗致ハ不道罪状を。申陳候ハ之ハ極老ハ候とて。吟味を不詰。其儘ハ可捨置譯ハ勿論。外ハ取斗方モ無之。先例等ハ不拍筋ト奉存候。右取調候趣。書面の通御座候。松平伊賀守。

○處刑條例

○播磨國風土記。讚容郡弥加都岐原條云。難波高

津宮天皇之世。伯耆加具漏。因幡邑由胡二人。大
驕无節。以清酒洗手足。於是朝廷以為過度。遣狹
井連佐夜。召此二人。余時佐夜仍悉禁二人之族。
赴參之時。屢漬水中。酷拷之所搦之處。即号羨加
都岐原。

○續日本紀云。天平寶字元年秋七月庚戌詔。更遣
中納言藤原朝臣永手等。窮問東人等。款云。每事
實也。無異斐大都語。去六月中。期會謀事三度。始
於奈良麻呂家。次於圖書藏邊庭。後於大政官院
庭。其衆者。安宿王。黃文王。橘奈良麻呂。大伴古麻

呂。多治比犢養。多治比禮麻呂。大伴池主。多治比
鷹主。大伴兄人。自餘衆者。闇裏不見其面。庭中禮
拜天地四方。共飲鹽汁。誓曰。將以七月二日。闇頭
癸兵圍內相宅殺劫。即圍大殿。退皇太子。次傾皇
太皇宮。而取鈴璽。即召右大臣。將使号令。然後廢
帝。簡四王中。立以為君。於是追被告人等。隨來悉
禁著。各置別處。一一勘問。始問安宿。款云。去六月
二十九日。黃文來云。奈良麻呂欲得語言云。爾安
宿。即從往。至太政官院內。先有二十許人。一人迎
來。禮揖。近著看顏。是奈良麻呂也。又有素服者一

人熟看此。小野東人也。登時衆人共云。時既應過。宜須立拜。安宿問云。未知何拜耶。荅云。拜天地而已云。甫安宿雖不知情。隨人立拜。被欺往耳。又問黃文。奈良麻呂。古麻呂。多治比。犢養等。辭雖頗異。略皆大同。勅使又問。奈良麻呂云。逆謀緣何而起。欵云。內相行政。甚多無道。故先發兵。請得其人。後將陳狀。又問。政稱無道。謂何等事。欵云。造東大寺。人民苦辛。氏々人等。亦是爲憂。又置剗。奈良爲己大憂。問所稱氏々。指何等氏。又造寺。元起自汝父時。今尊人憂其言不似。於是奈良麻呂辭屈而服。

又問佐伯古比奈。欵云。賀茂角足。請高麗福信。奈貴王。坂上。苅田麻呂。巨勢苗麻呂。牡鹿嶋足。於額田部宅飲酒。其意者。爲令此等人。莫會發逆之期也。又角足與逆賊謀。造田村宮圖。指授入道。於是一皆下獄。又分遣諸衛。掩捕逆黨。更遣出雲守從三位百濟王敬福。太宰帥正四位下船王等五人。卒諸衛人等。防衛獄囚。拷掠窮問。黃文。改名多道祖。改名麻呂大伴古麻呂。多治比犢養。小野東人。賀茂角足。改姓乃等。並杖下死。安宿王及妻子。配流佐度。信濃國守佐伯大成。土佐國守大伴古慈斐。

二人並便流任國其與黨人等或死獄中自外悉
依法配流又遣使追召遠江多治比國人劫問所
款亦同配流於伊豆國

○日本後紀云大同四年二月辛丑侍從中臣王連
伊豫親王之事經拷不服嬖臣激帝令加大杖王
背崩爛而死

○保元平治物語云保元元年七月十五日新院近
習の人々あるひハ遠國へ落行或ハ深山の外
小隠きて其行方を知されテ謀ヤ少納言入
道信西陣頭小於テ今度の謀叛人皆死罪を宥

め遠流小處せしむるへきニ其人ハその國彼人
ハかの國と定めしむるよし披露ありけれテ儲
わ命計ハ助らんとや思ひけ人みち出家の形
小成テホッリこより出来る左京太夫教長
卿と近江中将成雅と二人ハ口際なる所小出
家して有けきを周防判官季實をさし遣して
召捕る四條少納言成隆と左馬權頭實清と二
人ハ天台山浄土谷よて様をかへて座主の宮
へ参りけるこ水らを始として心も起しぬ僧
法師ふなつて水き劣らしと出まけるこ整墓

なれば。皇后宮權太夫師光入道。備後守俊道入道。能登守家長入道。式部太輔盛憲入道。弟藏人太夫經憲入道を。東三條小て。水問せらる。内裏より。藏人右少辨資長權右少辨惟方。大外記師業。三人承りて奉行せり。中ふも盛憲兄弟。前秦助安等を。鞞負聽よて。拷訊せらる。是等を左大臣の外職小て。事の起りを知らる。人。まゝ近衛院なり。ひよ義福門院を。呪詛し奉り。徳大寺を焼拂ひたり。申へを。問る。下部。下部。つ衣裳を剥取て。頸小繩を附らる。下部

向ふて。手を合せ。こゝ何事や。我を助ふと云け。水を。座小列せる官人。目をあてられ。覺り。然れども。刑法限ある事ある。七十五度の拷問をいす。ち。めハ聲を揚て。叫ひ。水とも。後よハ息絶て。このハをす。日。多き。小。七月十五日。盂蘭盆會。か。る罪。行ハる。、。我。無慙なれ。其上五位以上の人。拷器小よせらる。事。先例希。水尾帝清和天皇御時。貞觀十八年閏三月十日の夜。應天門の焼。り。を。大納言伴善男卿。逆意の嫌疑あり。使

聴小て。拷訊せしむる。例とて聞へける。か此
大納言ハ。實犯小て。同九月廿二日。終小伊豆國
へ。流さる。そむむの事也。近き世
小ハ例あり。情なりとて申ける。

○源平盛衰記云。治承四年十月。佐殿主從八人ノ
殿原ハ。小道ノ峠向ニ登テ。後ヲ顧レハ。敵マテ
カク追上ル。如何ハスヘキ。此上ハ自害スヘキ
カト宣ヘハ。土肥申ケルハ。物騒シヤ。事ノ様見
ントテ。高所ニ上テ見廻セハ。傍ニ御堂アリ。小
道ノ地藏堂ト云寺也。八人堂ニ入テ見レハ。上

人法師一人アリ。佛前ニ念誦シテ居タリ。土肥
上人ニ云様ハ。是源氏大將軍ニ。兵衛佐殿ト申
人ノ。石橋ノ軍破テ。敵ノ爲ニ被追懸。忍ヘキ所
ヤアル可助申。佛壇ノ中ニモ隠シラケト申ケ
レハ。上人思様難有事哉。實ニ聞奉ル。源氏ノ大
將軍ナリ。軍ニ負給スハ。今争カ箇様ノ法師ニ
助ヨト。手ヲ合給ヘキ忝事也。助奉テ世ニ御座
セハ。奉公ニコソト思テ。申ケルハ。此堂ハ人里
遠シテ。山深ケレハ。身ノ用心ノ爲ニ。佛壇ノ下
ニ。穴ヲ搆テ。人七八人入ヌヘキ程ニ。用意セリ。

暫忍入テ、御覽セヨトテ、八人ノ殿原ヲ押入ツ
ツ。上ニ蓋シテ、其上ニ雜具取ヒロケテ、我身ハ
佛前ニ座禪ノ由ニテ眠居タリ。大庭大勢引具
シテ、御堂ノ前マテ追懸テ、此寺ニ人ヤアル。只
今落人ノ通ツルハ、不知ヤ否ト再三問トモ。答
者ナシ。大庭打寄佛前ヲ見レハ、法師アリ、イカ
ニ人ノ物ヲ問ニイウヘハナキソ、不思議也ト
責ケレハ、僧ノ云、是ハ三箇年ノ間、四時ニ坐禪
スル者也。入定ノ折節ニテ不承ト申、重テ問フ。
落人ノ此軒ヲ通ツルヲハ、不聞ヤ不知ヤト。イ

ヘハ加様ニ坐禪シテ侍ハ、外ノ聲耳ニ入ス。内
心思慮ナケレハ、不聞不知ト云。景親大ニ嗔テ。
争カ知サルヘキ。拷問セヨトテ、軍兵堂内ニ打
入テ、上人ヲ捕テ、大庭ニ引出シ、拷木ニカケテ
己午ノ時ヨリ、申ノ時許マテ、上ツ下ツ推問ス
レハ、絶入スル事度々也。只云事トテハ、全不知
聞。落人トハ何者ソ。骨肉ノ親類ニモ非ス。又一
室ノ同明ニモ非ス。其分ニモアラヌ人ヲ隠シ
トテ、佛法修行ノ身ヲヤ可痛。只御景迹ト云ケ
レ共、死レハ水ヲフキ、生カヘレハ、拷木ニ上テ。

責ル程ニ四五度ノ時ハ終ニ上人ヲ責殺ス。猶
モ面ニ水ヲソ、キ喉ニ漿ヲ入ケレハ。又蘇タ
リケリ。思ケルハ。人ヲ助ントテ。角憂目ヲ見コ
ソ。悲ケレ。何事モ。我身ニマサル事ナシ。サラハ
オチント。心弱思ケルカ。良案シテ。生アル者ハ
必死ス。我身一ヲ生ントテ。争カ七八人ヲ亡ス
ヘキ。昔釋尊ノ菩薩ノ行ヲ立給ケルニハ。薩埵
王子トシテハ。飢タル虎ニ身ヲ任セ。ア毗大王
トシテハ。鳩ニ代テ命ヲモ捨給ケリ。縦身ハ徒
ニ亡トモ。此人々ヲ助タラハ。此堂ヲモ建立シ。

我後生ヲモ吊ナント。思返テ。問共落サリケレ
ハ。申ノ時ニハ。上人終ニ責殺サル。

○北條九代記云。貞永二年八月十八日ノ早朝ニ。
武藏守泰時ハ。榎嶋ノ明神ニ參詣アリケル所
ニ。前濱ニ死人アリ。年ノ比二十アマリノ男ナ
リケルカ。刺殺サレタル者ナリケリ。泰時不便
ノ事ニ思ハレ。御神拜ヲサシオキテ。直ニ御所
ヘソマイラレケル。評定衆ヲメシテ。沙汰ヲ經
ラレ。御家人等ニ仰テ。武藏大路。西濱。名越坂。大
倉横大路。以下。諸方ノ口々ヲ。堅メサセ。家々ヲ

搜シテ。犯科人ヲソ求メケル。カ、ル所ニ。名越
邊ニ。或男手ツカラ直垂ノ袖ニツキタル血ヲ
洗ヒケルヲ。アヤシミテ。岩平左衛門尉。此男ヲ
搦メ捕テマイラセケリ。水火ノ拷問ニ及ヒシ
カハ。有ノ儘ニ白状ヲ致シケル。

○正嘉元年八月十六日。鶴カ岡八幡宮ニ。御社參
アリ。馬場ノ流鏑馬以下。例ノ如ク行ハレ。ステ
ニ還御アリケレハ。日暮テ黄昏ニ及ヒケル。比
ニナリテ。伊具四郎入道。今日供奉ノ役ヲ勤テ。
山ノ内ノ家ニ歸ル所ニ。建長寺ノ門前ニシテ。

射殺サレタリ。誰トハ知ラス。蓑笠ヲ著テ。馬ニ
乗タル人。下部一人メシ具シテ。伊具入道カ。左
ノ方ヨリ行違ヒテ通りシカ。田舎ヨリ鎌倉ニ
參ル人ト覺エシ。カクテ伊具ハ。馬ヨリ落テ。一
言ヲモイハス。其儘死ケルヲ。即從オトロキテ。
引オコサントスルニ。大ノ矢ニ當リケリトハ
知レケリ。鏃ニ毒ヲ塗テ。射込タリトミエテ。五
躰ノ支節。離レクニナリテ。石瓦ヲ袋ニ入タル
如ナリ。相州時頼入道ニ訴ケレハ。諏訪刑部左
衛門入道ヲ召捕テ。對馬前司氏信ニ預ル。平判

官康頼入道カ孫。平内左衛門尉俊職。牧左衛門
入道等カ。一味内意ノ所為ナリト風聞ス。諏訪
入道陳シ申シケルハ。昨日平内左衛門。牧左衛
門入道。兩人某ノ家ニ會合シテ。終日酒宴シ。物
語イタシテ。門ヨリ外へハ出申サス。イカテ此
了ラ存スヘキト。兩人ヲ證據ニ立タリ。平内俊
職。牧入道ヲメシテ。問ル。ニ。慥ニ證人ニ立タ
リケレハ。是非ノ理リ明ラメ難シ。然ルニ。日比
御評定ノ義アルニ依テ。諏訪刑部入道カ。古シ
へノ所領ノ地ヲメシアケテ。伊具ニ付ラレシ

カハ。諏訪ト伊具ト不會シテ。互ニ物ヲモ不言。
ソノ上。射殺シタル矢束ノ延タルト。射ヤウノ
品ト。頗ル世ノ常ノ所為ニアラス。手垂ノ射手
ノ業ト覺ユ。諏訪カ所為疑ナシト。評定アリ。諏訪
カ下部ヲ捕ヘテ。水火ノ責ニ及ヒ。ツヨク拷問
シテ。汝カ主ノ刑部入道ステニ白状シタリ。此
上ハ何カ隠スヘキ。落ヨクト責シカハ。下部ナ
レ。忠義アリテ申ヤウ。諏訪殿ハ。カヤウノ拷
問ニ。耻ヲカクヨリハ。科ヲ負テ死セント。思ヒ
テ白状セラレ候ラヒスラシ。我ラハ下臆ナレ

ハ。拷問ノ耻ヲモ不痛。知ヌ丁ハ。イカテ申スヘ
キ。諏訪既ニ白状シ給ヒナハ。重テ我ラヲ。拷問
セラレテモ詮ナキ丁カト申ケルホトニ。慥ニ
ハ知難シ。相州時頼入道。ヒソカニ諏訪ヲ一人
御前ニメサレ。直ニ仰アリケルハ。伊具入道カ
殺サレシ丁。御邊ノ所為ナルヨシ。下部ノ高太
郎。白状セシ上ハ。疑ナキ丁ナリ。去ナカラ其子
細ヲ有ノ儘ニ申サルヘシ。品ニヨリテ。御命ノ
丁ハ申ナダメテ。助マイラセントアレハ。其時
諏訪涙ヲ流テ申ケルハ。是日比宿意アルニヨ

ツテ。今ハ堪忍モナリカタク。隙ヲ子ラヒテ。カ
ク仕リテ候トソ申ケル。時頼聞給ヒ。神妙ニ候。
イカニモ御前ヲ申調ヘテ。見候ラハシトテ。奥
ニ入給ヒ。不便ナカラモ。天下ノ法令ナレハカ
ナシ。同九月二日。諏訪刑部入道ハ。首ヲ切レ。平
内左衛門尉ハ。薩摩方。硫黄カ島へ流サレ。收入
道ハ。伊豆國ニソ流シケル。祖父康頼ハ。俊
寛ヲト同ク。硫黄カ島へ流サレ。孫ノ平内俊職
又コ、ニ流サレタリシハ。定テ因縁アルラメ
ト。思合セテオホツカナシ。

○鎌倉殿物語云。嘉吉元年辛酉五月十六日ノ夜十
三王殿歳ト安王殿十一ノ御兄弟ノ人々ハ。朝露消へ給フ。
妻殿事白状。夕メニ京都へソ上サシ。種々薬
ヲ與へツレテ。京都へソ上ケル。終ニ京へ上奉
行。所ニテ。様々ニ問ケル中ニモ。若君十人許御
座シケルト。天下ニ無隠レ。何方へ零行給。亦今
度組衆ハ。誰レイシソ。何有ノ儘ニ可申サモ左アラハ
命事可助ト申ケレハ。妻殿申ス様。自女ノ身組
衆ヲモ争可カ知。又若君御事。貳人座シツルヲ。無
隣失参セ。又残りノ御事ハ。天下ニ無隠ナレハ。

問給フマテモ不可有。自事命モ今ハ不惜。何問
給。共可申無事。氏伏シ沈ミケリ。去ル程ニ。膝ヲ
燥ヒ。指サヲ切。爪ヲ起シ。以火水種々問ケレ共。不
落ケリ。露霜ナラハ消モ失ナアント。思へ共。身
不任命ナレハ。思無甲斐ケレ。又大成蛇ヲ。喉へ
入ケリ。悲サノ餘リニ。板ヲ叩程ニ。蛇ヲ引出セ
ハ。暫息ヲ續テ。厥後我ト舌ヲ食切。咄出シケレ
ハ。人々視之。無舌而ハ。何事ヲカ可申。鼓問留追
放給ケリ。

○大平記云。元徳二年。事ノ漏易キハ禍ヲ招ク。媒

ナレハ。大塔宮ノ御行事。禁裏ニ調伏ノ法被行
事共。一々ニ関東ヘ聞ヘテケリ。相摸入道大ニ
怒テ。イヤク此君。御在位ノ程ハ。天下静マルマ
シ。所詮君ヲハ。承久ノ例ニ任テ。遠國ヘ移シ奉
リ。大塔宮ヲ死罪ニ處シ奉ルヘキ也。先近日殊
ニ。龍顔ニ咫尺ノシ奉テ。當家ヲ調伏シ給フナ
ル。法勝寺ノ圓觀上人。小野ノ文觀僧正。南都ノ
知教々圓。浄土寺ノ忠圓僧正ヲ。召捕テ。子細ヲ
相尋ヘシト。己ニ武命ヲ含テ。二階堂下野判官。
長井遠江守二人。関東ヨリ上浴ス。兩使己ニ京

着セシカハ。又何ナル荒キ沙汰ヲカ致サシズ
ラント。主上宸襟ヲ惱サレケル處ニ。五月十一
日ノ曉。雜賀隼人佐ヲ使ニテ。法勝寺ノ圓觀上
人。小野ノ文觀僧正。浄土寺ノ忠圓僧正。三人ヲ。
六波羅ヘ召捕奉ル。此中ニ忠圓僧正ハ。顯宗ノ
碩德也シカハ。調伏ノ法行タリト云。其人數ニ
ハ入ラサリシカトモ。是モ此君ニ近付キ奉テ。
山門ノ講堂供養以下ノ事。萬ツ直ニ申沙汰セ
ラレシカハ。衆徒典力ノ事。此僧正ヨモ存セラ
ヌ事ハ非シトテ。同召捕レ給ニケリ。是ノミナ

ラス。知教。教圓二人モ。南都ヨリ。召出サレテ。同
六波羅へ出給フ。又二條中將為明卿ハ。歌道ノ
達者ニテ。月ノ夜。雪ノ朝。褒敗ノ歌合ノ御會ニ
召レテ。宴ニ侍ル事隙無リシカハ。指タル嫌疑
ノ人ニテハ無リシトモ。睿慮ノ趣ヲ。尋問ニ為
ニ。召捕レテ。齋藤某ニ。是ヲ預ラル。五人ノ僧達
ノ事ハ。元來閑裏召下ノ。沙汰有ヘキ事ナレハ。
六波羅ニテ尋窮ニ及ハス。為明卿ノ事ニ於
テハ。先京都ニテ。尋沙汰有テ。白状有ラハ。関東
へ註進スヘシトテ。檢斷ニ仰テ。已噉問ノ沙汰

ニ及ントス。六波羅ノ北ノ坪ニ。炭ヲ、コス事。
鑊湯爐壇ノ如シ。其上ニ青竹ヲ破リテ。敷雙
へ。少隙ヲアケ、レハ。猛火炎ヲ吐テ烈々タリ。
朝夕雜色。左右ニ立雙テ。兩方ノ手ヲ引張テ。其
上ヲ歩セ奉ント。支度シタル有様ハ。只四重五
逆ノ罪人ノ。焦熱大焦熱ノ。炎ニ身ヲ焦シ。牛頭
馬頭ノ呵責ニ逢ラシモ。角社有ラメト覺ヘテ。
見ニモ肝ハ消スヘシ。為明卿是ヲ見給テ。硯ヤ
有ト尋ラレケレハ。白状ノ為カトテ。硯ニ料紙
ヲ取添テ奉リケレハ。白状ニハアラテ。一首ノ

歌ヲゾ書レケル。思キヤ我敷島ノ道ナラテ。浮
世ノ事ヲ問ルヘシトハ。常葉駿河守。此歌ヲ見
テ。感歎肝ニ銘シケレハ。泪ヲ流ノ。理ニ伏ス。東
使兩人モ是ヲ讀テ。諸兵ニ袖ヲ浸シケレハ。為
明ハ水火ノ責ヲ遁レテ。咎ナキ人ニ成ニケリ。
○元徳二年六月八日。東使三人ノ僧達ヲ。具足シ
奉テ。関東ニ下向ス。遠蠻ノ囚ト成テ。逆旅ノ月
ニサスラヒ給。不思議ナリシ事トモ也。圓觀上
人計コソ。宗印。圓照。道勝トテ。如影ノ御弟子三
人隨逐ノ。乘ノ前後ニ供奉シケレ。其外文觀僧

正。忠圓僧正ニハ。相隨者一人モ無テ。怪ナル店
馬ニ乗セラレテ。見馴ヌ武士ニ打圍レ。マタ夜
深キニ。鳥カ鳴東ノ旅ニ出給フ。心ノ中コソ哀
ナレ。鎌倉マテモ下シ著ケス。道ニテ失ヒ奉ル
ヘシ。ナレト聞ヘシカハ。彼ノ宿ニ著テモ。今ヤ
限り。此ノ山ニ休メハ。是ヤ限リト。露ノ命ノア
ル程モ。心ハ先ニ消ツヘシ。昨日モ過。今日モ暮
又ト。行程ニ。我トハ急カヌ道ナレト。日數積レ
ハ。六月廿四日ニ。鎌倉ニコソ著ニケレ。圓觀上
人ヲハ。佐介越前守。文觀僧正ヲハ。佐介遠江守。

司去首

忠圓僧正ヲハ。足利讚岐守ニソ預ラル。兩使歸
參メ。彼僧達ノ本尊ノ形。爐壇ノ様。畫圖ニ寫テ
註進ス。倍人ノ見知ルヘキ事ナラ子ハ。佐々目
ノ頼禪僧正ヲ請シ奉テ。是ヲ被見セニ。子細ナ
キ調伏ノ法也ト申サレケレハ。去ハ此僧達ヲ。
嗽問セヨトテ。侍所ニ渡メ。水火ノ責ヲソ致シ
ケル。文觀房。暫カ程ハ。イカニ問レケレ共落給
ハサリケルカ。水問重リケレハ。身モ疲。心モ弱
ナリケルニヤ。勅定ニ依テ。調伏ノ法行タリシ
条。子細ナシト。白状セラレケリ。其後忠圓房ヲ。

嗽問セントス。此僧正天性臆病ノ人ニテ。未責
先ニ。主上山門ヲ御語ヒアリシ事。大塔ノ宮ノ
御振舞。俊基ノ隱謀ナント。有モアラヌ事マテ
モ。殘所ナク白状一卷ニ載ラレタリ。此上ハ何
ノ疑カ有ルヘキナレ共。同罪ノ人ナレハ。閣ヘ
キニ非ス。圓觀上人ヲモ。明日問奉ルヘキト。評
定アリケル。其夜。相摸入道ノ夢ニ。比叡山ノ東
坂本ヨリ。猿共二三千群來テ。此上人ヲ守護シ
奉ル體ニテ。並居タリト見給フ。夢ノ告只事ナ
ラスト思ハレケレハ。未明ニ預人ノ許ヘ。使者

ヲ遣シ。上人嗷問ノ事。暫ク閣ヘシト被下知處
ニ。預人遮テ。相摸入道ノ方ニ來テ。申ケルハ。上
人嗷問ノ事。此曉既其沙汰ヲ致候ハシ。為ニ上
ラレテ候ツル間。驚キ存テ。先事ノ子細ヲ申入
ニ。為ニ參テ候也トソ申ケル。夢想ト云。示現ト
云。只人ニアラストテ。嗷問ノ沙汰ヲ止ラレケ
リ。同七月十三日ニ。三人ノ僧達。遠流ノ在所定
テ。文觀僧正ヲハ。硫黄カ嶋。忠圓僧正ヲハ。越後
國ヘ流サル。圓觀上人計ヲハ。遠流一等ヲ宥テ。
結城上野入道ニ預ラレケレハ。奥州ヘ具足シ

奉。長途ノ旅ニサスラヒ給。

